

鵜沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 7 号

追悼	田中隆尚さんのこと	片桐 幸雄	1
再録	森銑三氏と『ももんが』	田中 隆尚	12
	森銑三先生と「とろろの会」	石井 梢	14
	鵜沼の歴史的家屋をたずねて⑩	担当：有田 裕一・岡田 哲明	
	菊本別荘(観松樓のちに三宜荘)	岡田 哲明	18
	菊本別荘のこと	新田 貴代	28
	別荘時代の思い出	菊本 昭一	36
	藤ヶ谷にあった高瀬邸について		
	——母屋と離れの配置の一考察——	伊藤 聖	40
	福永陽一郎と藤沢市民オペラ【上】 ..	渡部 瞭	48
	80年前の面影をたずねて		
	——於松さんと鵜沼を歩く——	佐藤 和子	58
	「鵜沼の緑と文化財を守る会」について	中島 明	62
	「鵜沼を語る会」活動の記録	総務委員会	66

編集後記

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵜沼村久久比奴牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵜沼を語る会 発行

追悼

田中隆尚さんのこと

片桐 幸雄（所沢市在住）

昨年 10 月に亡くなった田中隆尚^{たなかりゅうしょう}さんは短歌のほかに代表作『茂吉随聞』などの散文の作品も多く、自分でも自著の作者紹介に「歌人・随筆家」としたりしているが、中核はやはり歌人と言ってよいだろう。斎藤茂吉にじかに師事したことを誇りとし、歌集も六冊を数え、少数ではあるが頼って来る後進の育成にも私などから見て意外なほど熱心だった。

職業上の肩書きは大学教授で、東大の独文科を出て前橋の群馬大学でドイツ語を教え、定年まで勤めた。ただしその間も前橋に居を移すことなく、中学卒業以後に住んだ湘南の鵠沼をずっと本拠とし、校務のためには前橋の宿泊所に何泊かして、毎週鵠沼と前橋の間を往復していた。

私が田中さんと知合ったのは前橋でのことだった。当時私は朝日新聞の前橋支局員で、日曜にも出勤することの多い生活をしていたから、田中さんが勤めとは別の時間を確保していて週の後半に悠然と鵠沼に帰って行くのがまことに羨ましかった。

山口県立豊浦中から一高へ

田中さんが生まれたのは山口県の長府で、中学までをそこで過ごした。長府は今では下関市に含まれているが、田中さんのいた頃は豊浦郡長府町で、田中さんはいつも長府とだけ言って決して下関とは言わなかった。それで私などはそこが下関市であることを長いこと知らずにいた。田中さんにはこういう旧套墨守のところがある。田中さんが出た豊浦中も、地図で見ると豊浦町というのがあるので、その中学でもあるのかと思ったくらいだが、実際は城下町長府の城址にあり、山口県立の県内有数の名門校なのだった。

ちなみに長府は乃木大將が育ったところで、乃木神社の境内には将軍が少年時代を過ごした家が保存されている。幕末に高杉晋作が藩政改革のために挙兵した功山寺などがあり、武家屋敷の土塀も残っていて、歴史を感じさせる落ち着いた町である。

田中さんの父君は長崎の出身で、経営していた海運会社が第一次大戦の折に巨大な利益をあげて富をなした。豪放な人で、孫文にも無償で多額な資金援助をしていたという。

そして長府を選んで十萬坪の土地を買い、イギリス人建築家に依頼してここに宏大な西洋館を建てた。ところが完工を前にして事業が急速に傾いて資金が足りなくなり、結局内装が出来ないままに放置される。そして何十年も人が住むことなく、この西洋館は華麗と荒廃の象徴のような姿を長府の一面にさらし続けることになった。この次第は長府出身の直木賞作家古川薫氏の短編『海と西洋館』に詳しく描かれている。

この作品の中で父君は田中隆の実名で出てくるが、田中さんの七番目の兄で長府在住だった医師の隆寛氏はR氏となり、田中さん自身のことは「R氏の弟（教授・文学者）は『茂吉随聞』（筑摩書房）を出している。」とだけ紹介されている。

西洋館は人が住むことは無かったが、田中家は同じ敷地内の別の日本家屋に住み、田中さんはこの宏大な敷地をかけめぐって育ったという。田中さんは後年、お金の苦勞もし、儉約家の一面も身につけたが、一方で鷹揚な坊ちゃんのところもあったのは、この育ちのよさから来たものであろう。

☆

昭和 10 年に隆氏が亡くなるとやがて田中家は鵠沼に住むことになり、田中さんは親戚の家にとどまって中学を卒業し、11 年春に母堂のもとに移った。この折のことが「桃園譜」（短編集『桃園譜』所収）に書かれていて、小田急線の本鵠沼駅から東に向かう商店街は「店舗はまばらの、空き地のある閑散とした通りで、田舎道といった方がよかつた。」などと描写されている。

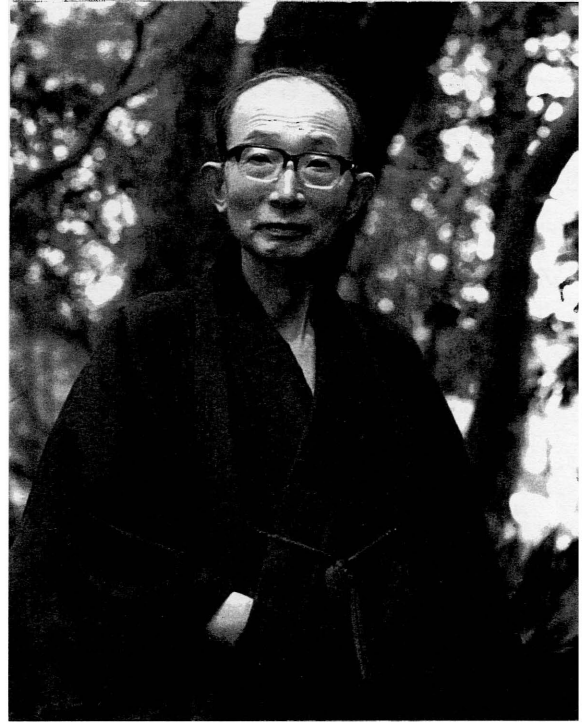
田中さんはここから東京の予備校に通って一高（第一高等学校）を目指すが、三歳上の八番目の兄隆行氏は一高理科乙類の三年生で、この年度の寮歌を作詞して一等に当選した。ちなみに一高では毎年 2 月 1 日の記念祭のために寮生から寮歌を募集し、数編が当選すると、あらためてその作曲を寮生から募集するということをしてきて、一般によく知られている「嗚呼玉杯」をはじめ何百もの寮歌が作られた。

当時もう文学士になっていた五番目の兄の隆泰氏は既に歌誌『アララギ』での作歌歴があり、隆行氏の作詞にあたって相談に乗ったようである。弟の目から見たその二人の兄の様子が『桃園譜』に記されている。歌詞は漢字に和語の読みをあてるなどの工夫が目立ち、構成は序、追憶（一、二、三、四）、結となっている。

ここでは序だけを引いておく。

新^{にい}墓^{はかり}の此の丘の上
移り来^{きた}し二^{ふた}歳^{とせ}の春
緑^{きよ}なす真^ま理^{こと}欣^と求^{もと}めつつ
萬^{よろづ}卷^{まき}書^{かき}索^{さく}るも空^{そら}し
永^{とこ}久^{しへ}の混^{まよ}迷^ひ抱^かきて
向^{むか}陵^かを去^さる日^ひの近^ききかな

この寮歌はやがて「駒場の玉杯」
とも言われ、昭和 10 年の一高の
駒場移転後の代表的なものとされ
るようになる。田中さんは夭逝し
た兄隆行氏への想いもあってこの
寮歌を尊重する気持ちが特に強く、
この寮歌の碑を建てることを晩年
の念願としていた。ただし私など
の感想をあえて言えば、この寮歌
を駒場移転期の名作と認めるのに
はやぶさかでないが、戦中戦後を経た駒場の一高をこの寮歌で代表させるような
ことには違和感を覚えざるを得ない。



鶴沼の松林で（撮影 中野六郎氏）

☆

身体検査のレントゲン所見で落とされるなどして浪人生活は三年にわたり、田中さん自身の一高合格は昭和 14 年になる。文科乙類の同級には神島二郎、橋川文三、三ヶ月章、末木剛博、須崎勝彌などの人たちがいた。

しかし田中さんは二年目に病気で休学することになる。心膜炎で一時はあやぶまれるほどだったが、幸い回復して退院出来た。この時の歌が私家版の第一歌集『黄道歸還』の中の「黄道歸還」（七首）である。

たまきはる命死なずて麥の穂をふたび見たり黄なる麥の穂
今しわれ歩みゐるなりたまきはる命生きつつ鶴沼の道を
歸りこし道に麥の穂黄に照らひほそほそ揺れてゐたりけるかも

一首目には田中さんはとりわけ愛着があるらしく、私の手もとにある『黄道歸還』の見返しには田中さんの筆でこの歌が書かれている。

のちの『茂吉随聞』によるとこれらの歌は16年9月一高生田中さんがはじめて茂吉を訪ねて見てもらったものである。茂吉は「歌はいい。みないい。」と言ったという。

こうした病気による休学に落第が加わって田中さんは一高で三回原級にとどまった。したがって同級生は四つの学年にわたる。社交家でもある田中さんは、私の印象では、どの学年のクラス会にもよく顔を出していたようである。田中さんは校内紙「向陵時報」に歌を発表していたから、一高歌壇の才能ある歌人としての田中さんに注目した同級生も少なくなかったことだろう。

東大独文科から群大教授に

大学は東大の独文科に入った。一時の休養のつもりとかで、いずれ医学部か法学部に変わりたいという気持ちもあったらしいが、結局ここは順調に三年で卒業した。なお私も同じ独文科で、田中さんの数年後輩になる。

交友関係や書くものから見ると、豊浦中や一高にくらべて独文科は影が薄く、そこから、田中さんは独文科ではかすんだ存在だったのか、とつい思いがちだが、実際は相良守峯、手塚富雄の両先生は、それぞれの包容力で、田中さんの独特の才能をちゃんと認めておられた。

相良先生は田中さん編集の同人誌『ももんが』を愛読なさっていたそうで、私とその同人に加わっていることも御承知だった。先生が文化勲章を受けられる少し前のこと、私は東北での学会のついでに先生の郷里鶴岡に立ち寄り、その図書館に設けられている先生の記念室を見学したので、帰ってからそのことで先生に手紙を差し上げたことがあった。先生はすぐ御返事を下さったが、その中に「さて田中隆尚君はすでに定年に達されたかと思いますがその後の御起居はいかゞなさっておられませうか。寸筆なりと同君の消息をお知らせ下さればありがたく存じます 同君の曾てのギリシアその他南国への講演旅行は目ざましいものでしたが、」とあり、私は再度報告の手紙を書いた。

手塚先生については、田中さんは少し長いものを書く構想をあたためていたようだったが、一回目が『ももんが』に載っただけで作者急逝のため未完に終わった。東大着任後まだ日の浅い手塚先生の様子や戦時下の文学部学生の動静などが描かれた興味深いもので、中絶はまことに惜しまれる。

田中さんは手塚先生の信任があつく、そもそも私が朝日新聞から大学の教職に変わることが出来たのも、当時ドイツ語教員の人事に影響力があつた先生への田

中さんの口添えによるところが大きかった。

☆

田中さんが群馬大学の先生になったのは昭和 27 年で、私が前橋ではじめて田中さんと知合ったのはその三年ほどあとのことになる。28 年に独文科を出てすぐ朝日新聞に入り、福島支局に赴任した私は、翌 29 年 7 月に前橋支局に転勤させられた。県庁や警察などの支局の主たる取材先は前からいる有能な支局員たちが担当し、私はいわば浮いた形で、新聞社用語の「遊軍」として「ひまだね」を探すことが多く、自然に大学にも顔を出すようになった。ニュースのたねになるのは医学部の専門の話題や、学芸学部の一部の先生が扱う県内の歴史や地理に関する事で、ドイツ語の先生はまず関係がないはずだが、そのうちに田中さんと話をするようになったのは、やはり一高の先輩ということがかかわっていたと思う。

田中さんを知ることによって私ははじめて短歌の世界に目を開かれた。最初に田中さんの歌を目にしたのは前橋営林局の広報誌『山脈』に載った赤城山の連作で、それは私にまことに鮮烈な印象を与えた。この時私は一挙に短歌というものの存在理由にも、それに精進する歌人の志にも、納得がいく思いがした。それらの連作はいま歌集『みづしも』の「赤城山その一（三十八首）」で読むことが出来る。

ここに^{おほの}して大沼の水はふかぶかと山にみちたる霧にかくろふ
^{こぬま}小沼にはすでに行かずてかへらめどたむけ路越えてきたりしものを
行き暮れて^{こぬま}小沼のほとりにつきしかば渚に手ひたし歸らむとする

大沼、小沼は赤城の山上にある湖沼で、おおの、この、と呼ばれる。大沼は火口湖で大きく、小沼は少しわきに登った離れたところにある。当時の赤城登山はバスが途中までしか上らないので、その先は歩いて外輪山の峠を越えたものだった。

前橋営林局は私の取材先の一つで、広報係長のト部斧司郎さんと親しくなり、編集している『山脈』に求められて二、三の小文を寄せたことがあった。ある時、群大の先生で書いてくれる人はないだろうか、と相談され、思いつくままに田中さんを紹介したのであった。迷惑ではなかったかと心配していたら、田中さんは予想以上に寄稿に熱心なので、安心もし、ほほうと思った。田中さんの歌にト部さんが、いいですねえ、と目を細めていた様子も思い浮かぶ。多分田中さんの作品は営林局内の歌に関心のある人たちの間で好評だったのであろう。

☆

もう一つ、田中さんを通じて知ることになったのは、安倍能成先生が校長だった戦前戦中の一高の雰囲気だった。それは私自身が体験した戦後の一高にくらべてずっと共同体の色合の濃いもののように思われたが、この印象は、田中さんに連れられて安倍先生を囲む一木会に出席するようになって、自然と得られたものであった。

一木会というのは安倍先生が校長の時期の生徒だった人たちが毎月第一木曜に安倍先生を中心として雑談をする会で、はじめは学習院構内の院宅、のちには下落合の先生のお宅で行われた。年次の古い同窓生が加わることもあり、出席は毎回十数人から二十人くらいだった。

田中さんの評伝『呉茂一先生』によると、この会を主唱したのは田中さんで、第一回は昭和 28 年 9 月、田中さんのほか市原豊太、荻部洋吉、小高敏郎氏らが出席した。安倍先生自身も『戦後の自叙伝』の中でこの会に触れ「首唱者は近年『茂吉随聞』といふ文章で、大分知られて来た田中隆尚である。」と書いておられる。

会の雰囲気は、同書での先生の文を借りると「世に時めいた者はむしろ少なく、中々すぐれた頭脳才幹を持ちながら、いはゆる秀才コースに乗らぬ者もあり、時代に対しても相当批判的で、酒の勢もあるが中々談論風発である。」私は前橋在勤の頃に田中さんに勧められて一度出席したことがあったが、33 年暮に東京本社に転じてからは、先輩たちの談論風発を聞くのが楽しみで、つとめて末席をけがしていた。

安倍先生は当時の生徒のことをよく御存知だった。ある時寮の委員長だった土屋六郎氏の話が出たことがあり、先生は「土屋とは東北線の汽車の中で会ったことがある」と言われた。土屋さんも朝日の記者で、翌日だったかちようど社で出会ったのでこのことを告げると、土屋さんは「へえー、よく覚えているなあ」とびっくりしていた。土屋さんは委員長として当然校長と接触があったわけだが、ここでは汽車で会ったことまで覚えておられるというので驚いたのである。

その頃の私は田中さんがこの会の主唱者だったとは知らず、ただ主要メンバーの一人と思っていた。田中さんは、私の知る限りでは、余り論議には加わず、必要な時に簡単に発言するという風だった。いずれにせよ、安倍先生は一高的教養の象徴のような存在だったから、会の常連の田中さんもまたそういうものの主流にいる人のように思われたものだった。

同人誌『ももんが』を創刊

ところで、『山脈』への寄稿に予想以上の熱意を見せた田中さんは、さらに一步を進めて、自分たちの雑誌を出そう、と言い出した。これが32年1月創刊の『ももんが』である。田中さんの一高以来の友人で横浜在住の荻部洋吉さんが発行人となり、前橋、横浜、長府などの数人が田中さんの勧誘に応じて同人として参加した。

編集人の田中さんはこの『ももんが』に「茂吉随聞」を連載した。雑誌の編集には毎月の分量を調節出来る手持ち原稿があると都合がよいが、この役を「随聞」が果たしていたことを、田中さんは単行本の後記で『ももんが』創刊にあたって「埋草として」連載したと書いている。この克明な茂吉訪問記はエッケルマンの『ゲーテとの対話』と比較する人もあってなかなか好評で、雑誌の声価を高めるのに貢献し、田中さん自身もこれによってかなり知られるようになった。

この訪問記は田中さんが一高生だった昭和16年から茂吉が亡くなる前年の27年までにわたる。田中さんが見てもらった歌に対する茂吉の具体的な批評は作歌をする人には大いに参考になるだろう。また一高でドイツ語を第一語学とする文科乙類にいて大学は独文科に進んだ田中さんは、ドイツの文学や書物について茂吉の良き相談役でもあり、二人の会話からはこの方面の茂吉の関心がよくうかがえる。

そのほか動物園に同行した時など、茂吉が道に落ちていた仁丹を拾って箱から出して食べ、田中さんにも渡すので、田中さんは「いたし方なしに一粒を口に入れ」た、というような話もあり、自然にふるまう茂吉の日常がよくとらえられている。こうしたさまざまなことがこくのある文章で綴られているので、独得な茂吉文献として注目されたのも当然のことだったろう。

しかし一方で、短歌界の何人かについて、用心深い茂吉が、当人あるいはその仲間の前では決して言わないことを田中さんには気を許してしゃべっているのが、そのまま記録されているので、関係者は愉快ではなかったに違いない。考えようによっては、これは茂吉の用心深い配慮を台無しにしているのだから、田中さんの記録公表は茂吉に対する背信ともいえる。このことは田中さん自身自覚していて、単行本の後記には「ひとへに先生への裏切ばかりでなく」という文言も見える。しかし田中さんは結局総合判断としてありのままの公表をよしとする。そこには相手や関係者に対する配慮よりも自分の目に写り心に浮かぶことを優先させるという一種の自己本位の立場があるように思われる。

「随聞」などで順調に滑り出した『ももんが』はその後休むことなく月刊を続けて今日に至っている。これは専ら昨年編輯人のまま急逝した田中さんの努力の賜物と言わなくてはならない。発行人は何人か交代したが編輯人は一貫して田中さんで、編集のほか経済面を含む運営全般をほとんど一人で背負っていた。そこから当然主宰者という言い方が出てくるが、田中さん自身はそれをきらって、編輯人の立場を守った。私が何かの文章でつい主宰という言葉を使った時はわざわざ訂正の電話があった。

同人の顔触れは、石田春夫（小説）、外山滋比古（エッセイ）、森銑三（随筆、西鶴研究）、梅崎光生（小説）、中平解（随筆）、田中隆寛（短歌）の各氏など、やめる人もあれば新たに加わる人もあり、長年の間にはかなり変遷して、いちいち名は挙げないが相当な数になる。また田中さんの求めに応じて呉茂一（訳詩）、矢島祐利（科学史、短歌、歌論）、鈴木一郎（小説）の各氏らの何号にもわたる寄稿があり、雑誌に生氣と厚味を与えた。いったい田中さんには勧め上手なところがあり、加藤淑子氏の山口茂吉の長編評伝などはその徳源が実を結んだ例であろう。

海外の文化とともに

田中さんは自分の書くもののほとんどを『ももんが』に発表した。『茂吉随聞』のあとには後に単行本『桃園譜』に収められた幾つもの短編などが続き、やがて多くの海外紀行文が書かれることになる。

田中さんがはじめて外国に出たのはローマの日本文化会館館長呉茂一先生の招きによる 41 年春のイタリア旅行だった。勤め先の大学の許可を得ずに横浜から船に乗ってしまい、事後連絡を頼まれた外山滋比古さんが大学に電話したら、代わりに怒られるはめになったという。ともあれこれがその後何回かにわたる海外旅行の序幕だった。

パリやロンドンに滞在したり、イタリアのほかギリシア、韓国、トルコなどもめぐったが、ドイツ語の先生なのにドイツに足を向けなかったのはいかにも田中さんらしい。そしてどの国に行くにもあらかじめ現地の言葉をちゃんと勉強した。英仏伊くらいなら珍しくもないだろうが、韓国語やトルコ語となるとそう簡単には真似が出来ない。中でも現代ギリシア語は田中さんにとって浅からぬ因縁となった。

田中さんの方法はリングホンなどの耳からの教材による練習で、毎日の勉強を何か月も続けたらしい。ギリシアの紀行文を読むと、そうして身につけたギリシ

ア語でつぎつぎと安い宿を見つけては泊まっている。まるでこれが目的の語学であつたかと思われるくらいだが、勿論それだけではなく、ギリシアの人たちとよくまじわって中味の濃いやりとりもしている。やがてその能力が行く先で認められ、二度目のギリシア訪問では各地で日本の古代文化について講演をするまでになった。最終段階でギリシア人に見てもらったとはいえ、三十分とか一時間の長い講演原稿を自分で書き上げているのだから、よくそこまでと、なみなみならぬ語学の才能に驚くほかない。

紀行文は44年の分が『へらす巡歴 南の巻』、48年の分が『へらす宵宴』(上・下)となった。ギリシア旅行の元来の目的だった古代の遺跡の探訪・見学は詳しく描かれ、博物館では浮彫墓碑などの一つ一つに丁寧な感想が記されている。これらの部分は専門家の参考にもなることだろう。またいろいろな人との出会いが、客を遇することの厚いギリシア人の人情の機微にも触れて、細かに記録されている。

克明な筆の運びは田中さんの関心にしがっているから、それに同調できない人は、時に失望し辟易するかも知れない。しかしひとたびすぐれた歌人で教養人でもある田中さんという人物に注目し、そのテンポを受け容れるなら、克明さはやはり非常な強味で、語学力のみを頼りに単身ギリシアを闊歩する快男児の一面もうかがえて楽しい。

ギリシアで出来た田中さんの友人にサモス芸術協会会長のプーチニスさんという人がいた。私がギリシア旅行でサモス島にも行って見た時にはプ氏は留守で、アテネに滞在中というので、アテネにもどってからその仮寓を訪ねた。予告なしの夜になっての訪問だったが、田中さんの友人ということで非常に喜び、街のレストランに案内して下さった。そして翌日も私のホテルに迎えに来て、また食事を御馳走になった。田中さんがギリシアに心の友を得ている様子がこうして実感できたわけである。田中さんはやがてギリシア政府からフェニックス勲章を授与されるが、それにはこうした友人たちの陰の尽力があつたものと私は想像している。

☆

最後に一つ。田中さんは生涯独身を通した。若い頃病身だったので文学に専念するためにそう決意したのだと言う人もいる。 (かたぎり ゆきお)

田中隆尚氏 年譜

- 大正7年(1918年) 12月7日 山口県豊浦郡長府町侍町に生まれる。
- 昭和6年(1931年) 長府町立豊浦尋常高等小学校尋常科を卒業する。
- // 11年(1936年) 山口県立豊浦中学校を卒業する。
- // 14年(1939年) 第一高等学校文科乙類に入学する。
- // 16年(1941年) 斎藤茂吉に師事する。
- // 19年(1944年) 第一高等学校文科乙類を卒業する。
- // 22年(1947年) 東京帝国大学独逸文学科を卒業する。
- // 24年(1949年) 第一歌集『黄道帰還』(私家版)を刊行する。
- // 27年(1952年) 群馬大学講師となり、ドイツ語を講ずる。
- // 年(// 年) 第二歌集『いさごち』(河出書房)を刊行する。
- // 32年(1957年) 片桐幸雄ほか数人とともに雑誌『ももんが』を創刊する。
- // 35年(1960年) 『茂吉随聞』上巻、下巻(筑摩書房)を刊行する。
- // 36年(1961年) 『茂吉随聞』別巻(筑摩書房)を刊行する。
- // 41年(1966年) 在ローマ日本文化会館館長呉茂一の招きにより、はじめてイタリアにおもむき、約40日イタリア各地を巡遊する。
- // 44年(1969年) ふたたびイタリアに行つて約40日間各地を巡遊し、それよりはじめてギリシアに渡つて約60日ギリシア各地を巡歴する。
- // 47年(1972年) 随筆『桃園譜』(乙骨書店)を刊行する。
- // 48年(1973年) ギリシア、サモス芸術協会ならびに外務省の招聘によって、ふたたびギリシアに行つて約80日巡歴し、その間サモス島、ミユチレエネ、サモトラケ島、テッサロニケ大学、アテナイ大学、ヨアニア大学、キオス島にて現代ギリシア語文語で「日いつる国」(日本上代文化)という演題にて講演する。
- // 年(// 年) サモス芸術協会名誉会員に推薦される。
- それよりイタリアに渡つて、ボロオニヤ大学にてイタリア語で「日いつる国」(日本上代文化)を講ずる。
- それよりパリへ行つて約半月滞在する。
- // 51年(1976年) 昭和44年度のギリシア紀行文『へらす巡歴』(乙骨書店)を刊行する。
- // 52年(1977年) 3月韓国に行つて約1か月周遊する。
- 7月パリへ行つて約半月滞在、それよりロンドンに渡つて約1か月滞在する。
- // 53年(1978年) ふたたびギリシア外務省の招聘によってギリシアに渡り、ヨアニア大学、テッサロニケ大学、アテナイ大学にて現代ギリシア語口語で「飛鳥奈良時代の文化」について8回の連続講義を試みる。
- (一部日数不足のため実現せず)
- // 年(// 年) その途次クレエテ島イラクリオンおよびレシムノン、コス島、アテナイパルナツソス文学協会、メツオヅン、ケルキユラ島、ミユチレエネ、サモス島、キオス島にて講演する。

- 昭和54年（1979年） 第一歌集『降雪』（河出書房）を刊行する。（『黄道帰還』を改訂。）
- 〃 55年（1980年） 群馬県前橋にギリシア人ニコス・チエンソスとともに現代ギリシア語教室を設立する。
- 〃 年（〃 年） 第三歌集『みづしも』（河出書房）を刊行する。
- 〃 59年（1984年） 群馬大学を定年退官する。
- 〃 年（〃 年） 第四歌集『しほなわ』（短歌新聞社）を刊行する。
- 〃 61年（1986年） 東京に現代ギリシア語教室を設立する。
- 〃 62年（1987年） 昭和48年度のギリシア紀行文『へらす宵宴』上の巻、下の巻（乙骨書店）を刊行する。
- 〃 63年（1988年） サモス芸術協会会長コスタス・プチイニスを招いて前橋および東京で演題「ピュタゴラス」という講演を実現する。
- 〃 年（〃 年） サモス芸術協会賞を受ける。
- 平成元年（1989年） 20日間イタリアをめぐるのち、トルコに行って約40日間巡回する。その途次クシャダスよりサモス島に渡ってサモス放送局よりギリシア語で訪問の挨拶を放送する。
- 〃 年（〃 年） 評伝『ささなみのおきな』（乙骨書店）を刊行する。
- 〃 3年（1991年） ふたたびサモス芸術協会会長コスタス・プチイニスを招いて前橋、東京、牛窓にて演題「ヒポクラテス」という講演を実現し、レフカデオス・ヘルン（小泉八雲）の故地松江その他を案内する。
- 〃 年（〃 年） ギリシア政府よりフェニックス勲章を受ける。
- 〃 5年（1993年） 第五歌集『おほなみ』（短歌新聞社）および評伝『呉茂一先生』（小沢書店）を刊行する。
- 〃 6年（1994年） 第六歌集『うたぶえ』（短歌新聞社）を刊行する。
- 〃 9年（1997年） 随筆『くろねこのうた』（青土社）を刊行する。
- 〃 14年（2002年） 10月21日肺炎のため永眠する。享年83歳。

この年譜はフェニックス勲章受賞の祝賀会にあたり、田中さん自身が作成されたものに基づいている。田中さんは旧字体の漢字（いわゆる正字）を常用され、この年譜も文語体・旧字体で書かれていたが、それを口語体・当用漢字に改めた。ただしギリシア語などの音訳は田中さん作成のままとした。 （編集部）

再録 森銑三氏と『ももんが』 田中 隆尚

『ももんが』が一冊だけ辻堂市民図書館にあるというので見に行った。平成7年9月号で、巻末に「森銑三生誕百年記念講演会」の予告が大きく掲載されていた。なる程と思い、同時に同人であったことが判った。次はその出会いである。森氏の『著作集』（中央公論社）を調べているうちに、第5巻の月報4に田中さんのこの一文を発見した。関係者の了解を得てここに転載する。 （編集部）

高崎に井上工業といふ土木建築の会社があつて、そこの社長の井上房一郎氏はブルウノ・タウトが滞日してゐたときに種々世話をしたので知られてゐるが、高崎に音楽堂をつくるのに骨折つたり、又そのころ高崎に美術館をつくるといつてその準備に意を注いでゐた。『ももんが』は編輯から印刷、発送にいたるまで前橋乃至高崎でやつてゐたので、その井上氏に人を介して紹介してもらつて援助方を依頼し、それを機縁として井上氏と『ももんが』との間の交友が生じた。

その井上氏が昭和三十七年の秋の或る日私に、あなたは鵜沼にお住ひださうだが、鵜沼に森銑三といふ人がゐる、四十年ばかりも前に高崎で小学校の代用教員をしてゐた人で、その頃自分も青年だつたので附合つて人生とか文学をよく論じたものだ、森さんは高崎を去つてやがて名を著はし、『渡辺崋山』とか『近世の画家』とかいつた本を出すやうになつた、その森さんが高崎を去つて有名になつてから一度も会つたことがないから、一度久々に会つて歓談したい、ついでには講演をおねがひしたいと思ふが、あなたが鵜沼にお帰りのときに折を見て、森さんの自宅を探して訪問して、ぢかにおねがひしてみてくださいないかと言つた。

私はそれで森氏の寓居を尋ね、井上氏の依頼を伝へた上、『ももんが』と拙著の『茂吉随聞』とを名刺がはりに献呈した。森氏から追つて思ひまうけぬ手厚い礼状が来て、『ももんが』と著書双方とも興味深く読んだ旨書かれ、折あらば『ももんが』を創刊号以来通読したいといふ旨が書き添へてあつた。井上氏の招聘はさういふ事で翌昭和三十八年四月二十八日に実現し、森氏は四十年ぶりで高崎を再訪され、高崎市立図書館で「絵本についてのむだ話」といふ題で講演され、その後鳥料理屋に旧知が集つて懇談した。

一方森氏と私との間では『ももんが』の創刊号以来の合本を借りたり返したりのために森氏自身わざわざ鵜沼の拙宅を訪問されるやうになり、その間に『ももんが』の会則といつたやうなものを尋ねたりされ、三十七年の暮には森氏御自身

の方から、自分も同人として参加させてもらひたい、それについて同人費といふものも他の人と同様に受取ってもらひたいと云われたので、私は大変意外な感じがしたのであつた。森氏は戦前から戦後にかけてすでに数冊におよぶ書を著してをられ、又現にいろいろな雑誌に文章を発表してをられたから、それまでの同人が『ももんが』以外に発表機関を持たぬか、或はわづかにしか持つてゐなかつたのとは全く事情が違ふ。さういふ森氏が『ももんが』の側から別に要請もしないのに進んで入つてこられたのは願つてもない幸で、『ももんが』自体が認められたといつてもよかつた。

『ももんが』は昭和三十二年一月に創刊し、爾来月刊をつづけてきたが、ちやうど森氏と知合つた年の三十七年の三月には、それまで頼んでゐた印刷所で長期のストライキがあり、三月号の校正出来をさんざん待たされた後に、『ももんが』の印刷は今後お引受けできぬから他の印刷所に移つてもらひたいと云われた。それから新しい印刷所をさがすのに難儀して一ヶ月以上も遅れ、その後も印刷所の事情で遅れが増したり、印刷費の値上げなどで、月刊維持にいちじるしい困難をきたしてゐた。

森氏の入会はちやうどさういふ時にあたつてゐたので、『ももんが』が認められたといふことは同時に今後も困難を乗り越えて維持してゆかなくてはならぬといふ励ましにもなつたし、又他の同人と違つて森氏は会費を半歳分も前納して下さつたので、経営上のうるほひが多大で、森氏が前納して下さつてゐる間に雑誌を絶やしてはなるまいといふ氣にもなつたのである。

そんな機縁で昭和三十八年一月号に初めて森氏の「坂本繁二郎のことども」が載り、続いて二月号には「ひとりごと」、三月号には羽鳥千尋に関する小文を含む「三編」が載つた。爾来特別な障碍がない限り毎号原稿を寄せられ、編輯の便宜をはかつて常時埋草原稿を用意してわざわざ拙宅に足を運ばれたり、郵送されたりし、又『ももんが』の例会には鶴沼や東京は無論のこと、前橋で開くときも遠路を少しも苦にされる様子もなく訪ねてこられた。

かうして現在にいたるまで早くも満八年の歳月が流れたが、その間に『ももんが』誌上で発表された一番大きなおしごとは、『好色一代男』以外に西鶴の真作は存在しないといふ論の展開であらう。『ももんが』の読者は恐らく大部分森氏がこれまで縷々として述べられた所説に納得したことと思ふが、少くとも編輯人の私は森氏の所論の正当性にくみし、これが一日も早く学界に容れられる日を待ち望んでゐるのである。

(たなか たかひさ)

森銑三先生と「とろろの会」

石井 梢（市原市在住）

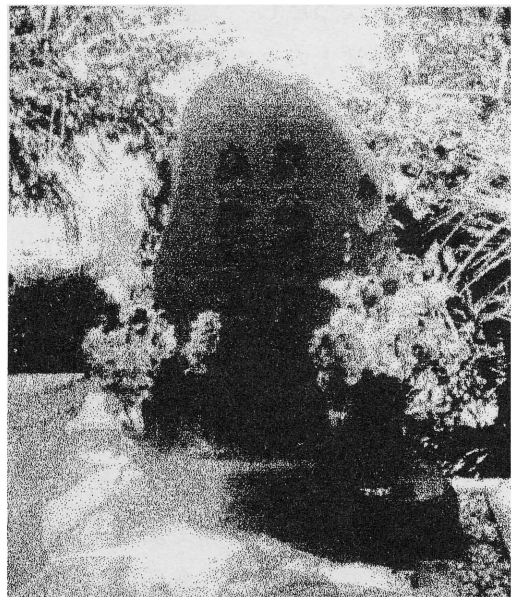
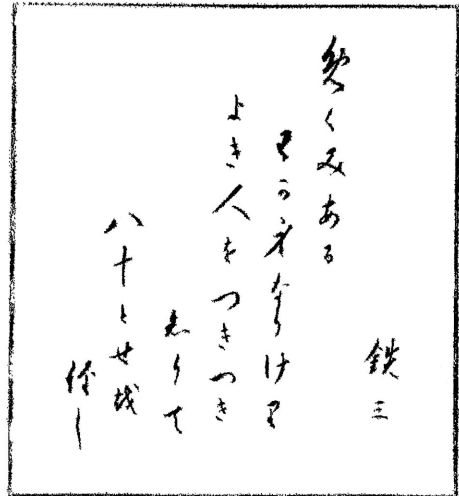
萬福寺に建てられた森先生夫妻のお墓

平成 14 年 3 月、鵜沼神明の萬福寺に森銑三・篤子ご夫妻のお墓が建てられました。そして今年 15 年 3 月のお彼岸に、篤子様の姪になる岸田郁子（横浜市）、金田直子（島根県江津市）のご姉妹が墓参にみえられましたので、墓碑の建立にお力添えした私も一緒しました。

お墓は萬福寺の山門を入って、参道のすぐ左側にあります。この場所は森先生の勉強会のお仲間だった萬福寺の荒木住職のご好意によって提供されたものだそうです。背丈くらいの自然石の墓碑には「森銑三 森篤子 之奥津城」の文字が彫られ、裏面には森先生の短歌が万葉仮名で

「めぐみある わが身なりけり
よき人をつぎつぎ しりて 八十
とせを 経し」
と刻まれています。これは先生が書かれた色紙（右上）の文字を刻んだものです。

いつか赤坂の「無量庵」に先生をご招待したとき、お仲間の前川百合子さんがお願いして書いていただいた色紙の一枚で、歌碑のためにと荒木住職に寄贈されたものでした。



森銑三・篤子夫妻の奥津城
（裏に上掲の歌が刻まれている）

先生はこの日、お酒を少し召さ
れてご機嫌うるわしく、長年住ま
れた藤沢の地をいとしまれ、萬福
寺のご住職にお墓のことはお願い
してあるので安心です、と語られ
たのでした。

墓碑の左手に建てられた墓誌に
は、右のような年譜が刻まれてい
ます。

「昭和三十七年 ももんが同人」
と記されているのが目を引くと思
いますが、これは田中隆尚先生と
特に深いご縁がありましたので、
ぜひにとお願いして加えていた
きました。

研学院釋洗雲 昭和六十年三月七日 森銃三 八十九歳
明治二十八年九月十一日 愛知県刈谷に出生
大正 七 年 刈谷小学校にて教鞭をとる
大正 九 年 高崎南小学校にて教鞭をとる
大正 十五年 図書館講習所を卒業後 東大史料編纂所勤務
昭和二十二年 弘文荘 入社
昭和二十五年 早稲田大学 教育学部 講師
昭和三十一年 ももんが同人
昭和四十五年 中央公論社より 森銃三著作集 出版
昭和四十七年 第二十三回読売文学研究翻訳賞受賞
研精院釋尼篤信 昭和六十二年六月四日 森篤子 八十歳
明治三十九年八月十六日 大阪に出生
昭和十五年 滝村家より 森銃三に嫁す

先生を囲んだ懐かしい集いの数々

いまでも先生との小さな、なつかしい数え切れない会合の数々をよく思い出
します。そこでは文学に関わる様々な事が話され、それは興味深く、ゆかいな充実
したひとときでした。

本でしか知り得ない、文学の神様のように思っていた人々が、生き生きと昨日
お会いしてきたばかりの友人のように語られ、またその周囲の人々のことなどが
次々に話されるのを、一語もらすまいと夢中でお聞きしたのでした。会のあとの
数日は、そのなかに浸りきって暮らし、夢心地でおりました。本当に他の何も
かもが色あせて見えたものでした。

「とろろの会」をやります、と先生からご招待を受け、何人かで先生のお宅に
うかがい、ご馳走になることができました。それは先生がお好きだからと、毎年
どなたかが自然薯を送ってくださるからでした。ある日の「とろろの会」のとき、
書物以外は何一つ動かされたことのない先生が「そうじゃありません。こうです」
と手本まで見せてくださっての陣頭指揮でいらしたと、その日お手伝いの指示を
うけた^{かた}芳の閉口した報告に驚き、そしておかしくもあり、また感謝もしたのでし
た。

私はときどきお葉書でお誘いをいただき、美術展などにお連れいただいたのですが、そのころ若い人が先生の周囲に大勢集まるようになり、一緒にお誘いくださるようになったのでした。私たちだけの日もありましたが、多くはお客様を招かれ、その方と様々なお話をなさるのを、私どもに聞かせてくださるといったものでした。集まりはお宅以外でも時々開かれ、それはいつも美味しい、おしゃれな店を選ばれ、盛り沢山のお話と食事とで、とても楽しいひとときでした。

麻布の「永坂更科」では必ずご主人が出てこられ、しばらく会に加わったりなさいました。ときにくださるお土産の茶巾寿司は、赤坂見付駅近くの「有職」さんに注文する役を誰かが指名され、そちらでも先生をご存知で、有職さんで届けてくださったり、更科さんで取りに行ってくださいたりしました。赤坂の「無量庵」、鶯谷の「笹の雪」、上野の知られたおでん屋、江ノ島の日本料理の店、藤沢の「三笠会館」などなどが思い出されます。

先生の早稲田での教え子の山口勝代さん宅や、先生ご指導の文章や短歌を先生に薦められて『ももんが』に出されていた斎藤百世（尾崎）さん宅でも開かれ、その他様々な所で開かれました。お客様は文学を好まれる、その方面がご専門らしい方々でした。先生は、私どもをも何か優れているからではなく、その人らしい所に好意をもってくださり、ご指導くださったのでした。

時々お見えになられたのは『赤い鳥』で編集を手伝っておいでだった町野禎子（丹野）さんや、横浜の三溪園の主、原三溪のお嬢さんで歌人の河杉はつ子さん、「梶子」の作者野溝七生子さんらで、他には出版社の方や、大学で教えている方々でした。

そのころ先生の周囲はとても賑やかで、私たちの他、奥様の叔父様の石井柏亭画伯のご長男、つまり奥様の従兄弟の石井潤さん、甥御さんの金田國男さん、刈谷で最初に教えられた人たち、「三古会」や「ももんが」の方々、利用される図書館の方々とのご交流も多く、文通の方々のなかには訪ねてこられる方もおいででした。各方面からの本の寄贈も多く、それにはすぐに全部に感想を返していらしたのです。

先生は朝一番で上京され、時間まで八重洲北口駅の待合室で勉強されていたので、朝そこにうかがえば必ずお会いできるのです。そのことをお聞きになられたか、三越の美術部の方が三越美術館のチケットを欠かさずお届けくださり、先生はとてもお喜びでいらしたのです。私も時々お供をさせていただいたものでした。

明治女性の強さと優しさの賢夫人

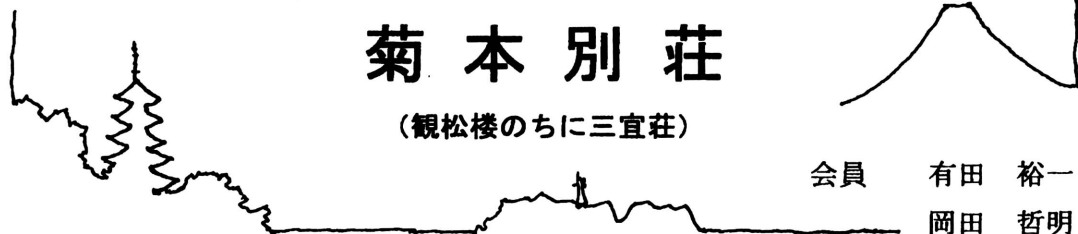
奥様は旧幕臣の家の長女として育たれ、お花もお茶も書も絵も免許皆伝でいらして、教室をお持ちでした。手芸もお上手で、お見舞いにあがった私の息子にお菓子の上のリボンで、たちまち玩具を作ってくださるのでした。また萬福寺さんの四季折々に掛けられてある掛軸の絵の作者を、即座に言い当てられた唯一の方とは萬福寺の奥様のお話です。ご生家滝村家をお継ぎになられ、家督とともに森先生に嫁がれて全てを森先生と森家のために注がれたのでした。持てる力の全てを活用されてのお働きは、明治生まれの古い習慣のなかでの嫁としての役割、現代に活躍する女性のなかにあっても劣ることない、自己を生かしてのお働きと、共にをお持ちの古さを守り新しく生きる前向きの方でいらしたのでした。

私たちには気さくでお優しい方で、私は時々、会場を離れて奥にうかがい、話し込んだりいたしました。その奥様とたった二人のご姉妹で、奥様亡きあとの相続人となられた妹さんの金田筵子様は島根県で教職に就かれた後、源氏物語の講座を開いておいでの地元では知られた方で、森先生とは文学のことで数え切れない数のお手紙を交わされ残されているとのこと。一冊の本にでもなろうかという膨大な森先生からのお便りは、源氏物語へのお考えが綴られていることと思います。いつか先生は「源氏物語訳をしてみたいもの」と思っておりますが、しかしもう時間が足りないでしょうなあ。私の時間はあと幾ばくもありません」と残念そうに話されたのでした。

亡くなられて十年余りそのままになっていた遺稿類を、どこかの図書館にとのご遺族の希望を聞き、そのことで初めてご遺族と話す機会を得、萬福寺さんが先生ご夫妻のために墓所を決めてくださってあることもお話したのでした。遺稿類は平成12年4月に無窮会図書館（町田市玉川学園）に寄贈されましたが、お二人の分骨は萬福寺さんにお預けしたままになっていまして、ご住職の「この世で最後の仕事」と思っております。しかし私も高齢です」とのお言葉に、私は長い間気になっておりましたことをご遺族にお話したのでした。

私たちは、私どもと先生を知る人々で墓碑をと考えていましたが、お墓のことは遺族のすべきこととの筵子様のお考えで、場所と基礎の石はご住職のご好意をいただき、ご遺族がお建てになりました。開眼供養には多くの方々からご厚志を賜り、古いお友達のご子息やお嬢様の参列までいただき、お世話役冥利に尽きる日々でございました。十七年目にして墓碑の設立がかないまして、なによりのこととございます。

（いしい こずえ）



はじめに

平成 10 年、第 22 回鵠沼公民館まつりにおける「鵠沼を語る会」の展示内容は「鵠沼の別荘…大正から昭和にかけて」であった。そのなかで別荘をその利用実態からつぎの 4 群に大別している。

A 群…開発初期の段階で誘致された大区画別荘。華族、銀行家、実業家など、いわゆる名士の別荘。

B 群…大地主の経営による貸し別荘。

C 群…関東大震災後、被災した東京の本宅から移住してきた人たちが常住した住宅。東京への通勤者のはしりとなるが、地元ではこれも別荘と呼んだ。

D 群…地元の業者が単独あるいは共同で土地を造成し、比較的小規模の住宅を分譲、販売した別荘。

なかでも A 群に属する別荘は広大な土地に豪壮な建築物が建てられた。江ノ電鵠沼駅前^{かき}の賀来神社境内に建つ鵠沼海岸別荘地開拓記念碑、建碑賛成者名の碑に記された開発初期に別荘を構えた人士はじつに錚々たる名士ばかりである。

^{おきやう}大給、蜂須賀、藤堂、久松は華族であり、実業界では三井物産の益田、馬越、小田柿、千葉、中丸、日本電気の岩垂、日本郵船の^{ながと}各務、麒麟麦酒の田中(常)、金融界では三井銀行の菊本、興銀の佃、平鹿銀行の最上、東京株式取引所の郷、伊藤(幹)、帝国興信所の後藤、豪商では松屋の伊藤(清)、内藤、日本橋太物商の松本、医師の金杉等々。

このたび菊本一族の方々のご好意により「菊本別荘」に関する多くの貴重な資料を提供していただいたので、はじめてその全容が明らかとなった。

「菊本別荘」は土地約 3,800 坪余、敷地内建物 18 棟(本館、新館、別館 1、2、撞球場、茶席、あずまや、自動車車庫、運転手室、留守番住居、亭 5、井戸館、倉庫、物置)建築物の総面積 330 坪余、A 群のなかでも特筆に値する規模を有する堂々たる大別荘であって三井銀行初代会長、菊本直次郎の別荘である。

菊本直次郎（1870～1957）について

菊本直次郎は明治3年9月12日、三重県伊賀国阿拝郡上野萬町29番屋敷(現、上野市万町2263番地)に藤堂家旧臣菊本保有の次男として生まれる。ちなみに保有は第八十三国立銀行の創立者である。

明治25年12月、慶応義塾大学(当時専門学校)理財科第1期生として卒業。翌年1月三井銀行に入行。大阪支店貸付係長、和歌山、神戸、函館各支店長を歴任。

明治37年、本店調査役、深川支店長、同43年、大阪支店長。大正2年、本店営業部長。同7年、常務取締役。

大正13年3月28日から同14年2月10日まで欧米、印度、南洋を視察。

昭和9年、初代会長。同10年に満州、上海を視察。同11年退任。後、寿重工業社長、日本パルプ工業社長を歴任。同14年、日本パルプ社長を辞任するも没するまで取締役の任に当たった。

明治29年、伊賀西條の豪族、宮川治部之輔保智の三女ひさと結婚、5男2女をもうける。

東京南青山6丁目に800坪の広大な敷地に150坪の自邸を有し、京都岡崎にも別邸「碧山荘」を持ち、大正の始めに鷗沼に別荘を構えた。

昭和19年、郷里の伊賀上野に戦時疎開し昭和32年、88歳で他界するまで同地に住んだ。

清廉潔白、几帳面で義理かたくなにかにもバンカーらしい風貌は和田英作が描いた肖像画にもよく現れている。小柄ではあったが斗酒をも辞さぬ酒豪であり、茶道、書道、俳句、囲碁など多趣味な風流人で「碧山」と号した。

また、郷土の俳聖松尾芭蕉の研究家であり関係文献、骨董美術品の蒐集家でもあって養虫庵を個人所有していた時期もあるという。後年、蒐集品62点を財団法人芭蕉翁顕彰会に寄贈している。著書に菊本碧山著『俳聖余光』『蕉影余韻』『続、蕉影余韻』がある。

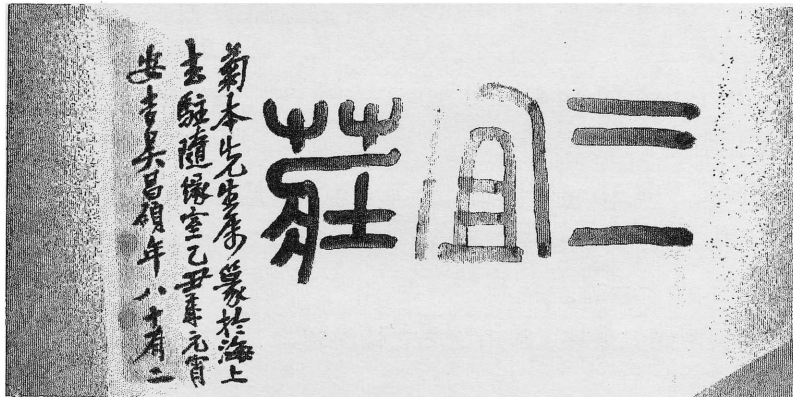


菊本直次郎氏肖像

芸術院会員 和田英作 画

三宜荘（さんぎそう）

「菊本別荘」という呼称は“菊本家の別荘”という意味で出入りの商人や職人など地元の人々の呼称であり、菊本家ではこの別荘をはじめは「観松楼」と呼んでいたという。大正 14 年に中国の著名な書画家、呉昌碩^{ごしょうせき}が来遊し、この地からの景観、富士、江ノ島、竜口寺の五重塔の三景宜しきをもって「三宜荘」と命名し扁額を揮毫した。それからは「三宜荘」で知られるようになった。奥田操という人に『鵠沼海岸』という著書（昭和 12 年発行 有斐閣）がある。昭和 9 年に半年ほど鵠沼で貸し別荘生活（木下別荘）をした手記であるが、文中に“……この辺の別荘は何々荘と称える、萬翠荘、三宜荘、松琴荘、曰く何々荘と。楼とか館とか亭とかいうのはない……”とある。菊本別荘三宜荘は数ある鵠沼の別荘のなかでも有名別荘のひとつであった事をうかがわせる記述である。



三宜荘の扁額 呉昌碩 筆

場所と敷地規模

所在地は神奈川県高座郡藤沢町鵠沼字下藤ヶ谷 7393 番地の 9,15,16,35,36,61 現在の住居表示では藤沢市鵠沼松が岡 1 丁目 10 番、11 番の区域である。江ノ電鵠沼駅から海に向かっての道を南下し大曲の手前、もと藤ヶ谷橋の掛かっていた辺りの左側に当たる。

敷地は L 形で敷地面積はおよそ 3,800 坪余、大正元年（1912）に伊藤幹一から 2,430 坪を 2,273 円で購入している。伊藤幹一発行の代金領収証は五十嵐秀郎宛となっている。五十嵐は仲買人であろうか。

他は公図に道家所有と記載のある土地を約 1,370 坪入手したもようである。道家の出自は今のところ不明である。

建築物の配置と造園計画

「鵠沼菊本別荘案内図」の原本はトレーシングペーパーにフリーハンドの墨汁ペン書き、水彩絵の具で着彩されている。敷地の形状、各建物の形状、配置は正確で建物は斜線を引いて表示され、門、敷地内通路、池や庭園の様子まで詳しく縮尺 1/750 で書かれている。これは明らかに建築の専門家が作製したものと推定され菊本別荘全体を明確にする重要な資料である。

それには筆による加筆と黒インクでペン書きの加筆がある。二度の加筆はノンスケールであり素人の手であるから菊本家のどなたかがなされたものと推測されるが筆跡は同一人物、筆が先でペンが後とおもわれる。なお本館西側にトイレ付きの洋室が増築されている（「菊本家鵠沼御別邸内各建物平面図」には記載されている）が加筆されていない。

斜線を引いた別館は後の加筆の別館と区別するため新館と呼ぶ事にする。上記平面図には御新館と記載されているからである。

鵠沼駅に一番近い角から緩やかに登ってゆくと二本の石柱の表門があり更に入ると車寄せがあつて玄関に到達する。北側道路に裏門（サービス用）。南側の庭に出ればただらと下りながらの散策路がカーブを描き、藤が谷橋脇にでる中門へ、南側道路に沿った水路に掛かる小橋に出るもう一つの裏門へと通じている。庭園には大きな池が二つあり、南側敷地沿いに流れる水路より取水し、オーバーフロー水は水路に戻り片瀬川へ流れ込む。ふじだな 3 ケ所、亭 5 ケ所、あずまや、茶席を配した凝った庭園で十三塔や鹿の置物がおかれていたという。

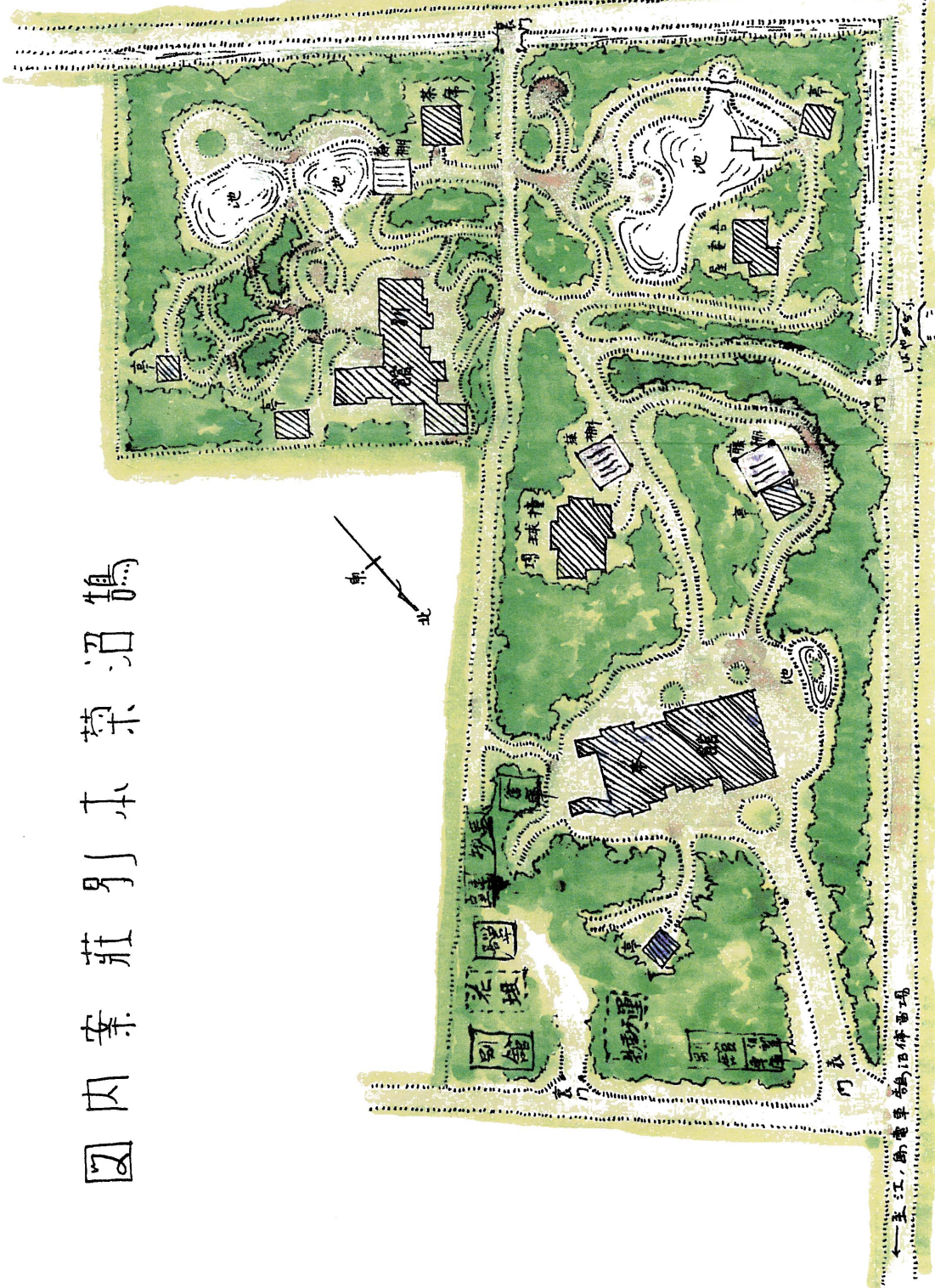
本館は敷地内の一番高い場所に建てられていて真南よりやや西に向いて丁度海岸線に正対しているから二階からの眺望は素晴らしかったに相違ない。

新館は新館というからには本館より後に建てられたと思われるがそれほどの時間差はなく本館にひきつづいての普請であつたのであろう。間取りはまさにゲストルームであつて直次郎のこの別荘を社交的にも利用しようという意図が汲み取れる。本館よりやや低い海寄りの位置にあつて当初は茅葺であつたが震災で倒壊、立て直すに際して瓦葺になったという。

この主だった 2 棟のほかに瀟洒な洋風の撞球場があつた。当時、玉突きは流行で旅館東屋の近くにも玉突き屋があつたくらいであるから資産家が自家用を持つのはさして珍しい事ではない。

加筆された部分は別荘利用上おいおい必要となつて建設されたもののようで、別館 1、別館 2、自動車車庫、運転手室、留守番用住居、物置などである。

圖內案莊別本榮沼鵠



← 主和路

← 主江，向電車路，沿律馬路

建築物の概要（菊本家鵠沼御別邸内各建物平面図、坪数表による）

本館：木造 2 階建て一部洋風建築、床面積 1 階 109 坪、2 階 52 坪、延 161 坪

間取りは洋間 2 室、和室 9 室(畳数 87.5 畳)、本玄関、内玄関、台所、浴室
化粧室、便所 5 ヶ所、納戸、電話室、ベランダ、広縁(畳廊下)、階段 2 ヶ所

* この本館は昭和 21 年～28 年のあいだ米軍に接收されていた。返還後に東急電鉄に売却されたが五島慶太がクラブハウスとして使用する目的で移築したとされているがその所在は不明である。

新館：木造平屋建て、床面積 50.1 坪

間取りは和室 6 室(畳数 35 畳、茶室「撫松庵」、女中室を含む)、玄関、台所、浴室、便所 3 ヶ所、廊下、板の間(7 畳分)

* 当初は茅葺であったが関東大震災で倒壊し建て起しをする際瓦葺に変えられた。茶室、女中室は取り壊されたが主要部分は現存している。

撞球室：木造平屋建て洋風建築、床面積 11.2 坪

間取りは作り付け腰掛(2.5 間)つきの撞球室、便所

* ステンドガラスが嵌め込まれたモダンな施設。昭和 30 年代、鈴木メソードのヴァイオリン教室に使われたからご存知の方もあろう。

あずまや：木造平屋建て、床面積 5 坪

間取りは和室 1 室(3 畳) 小縁、土間

茶席：木造平屋建て、床面積 4.5 坪

間取りは和室 1 室(5.5 畳)、便所

亭：木造平屋建て 5 棟。うち床面積 2.25 坪のもの 3 棟、1.5 坪のもの 1 棟、1 坪のもの 1 棟、庭園のあちこちに分散して建てられていた。

間取りはいずれも L 形に腰掛を設置、四本柱で中は土間である。

以上が「鵠沼菊本別荘案内図」原本に当初から記載されているもの。以下加筆分。

留守番住居：木造平屋建て、床面積 17 坪

間取りは和室 2 室(畳数 12.5 畳)、台所、浴室、便所、物置

別館 1：木造平屋建て、床面積 18 坪（東京青山の本邸から移築）現存

間取りは和室 2 室(畳数 18 畳)、便所、廊下

別館 2：木造平屋建て、床面積 14.41 坪

間取りは和室 2 室(畳数 16 畳)、便所、廊下

運転士部屋：木造平屋建て、床面積 12.25 坪

間取りは和室 6 畳、便所、物置 2、漬物小屋、

自動車車庫：木造平屋建て、床面積 6.33 坪

間取りは 1 室、間仕切りなし。

倉庫：鉄筋コンクリート造、地下 1 階、地上 1 階、床面積、地下 5 坪、地上 5 坪、計 10 坪。用途は自動車のガソリン、ボイラー用燃料(灯油、重油)の貯蔵庫ではないかと思われる

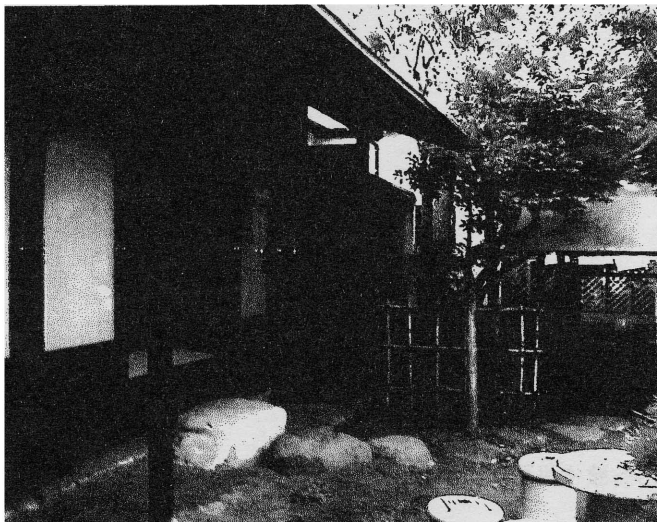
井戸館：木造平屋建て、床面積 3 坪

物置：木造平屋建て、床面積 1 坪

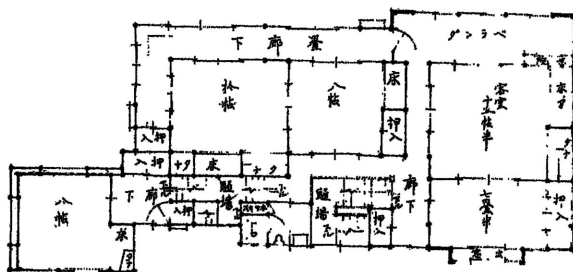


上：新築時(大正 7 年ころ)
に撮影されたと推定
される新館

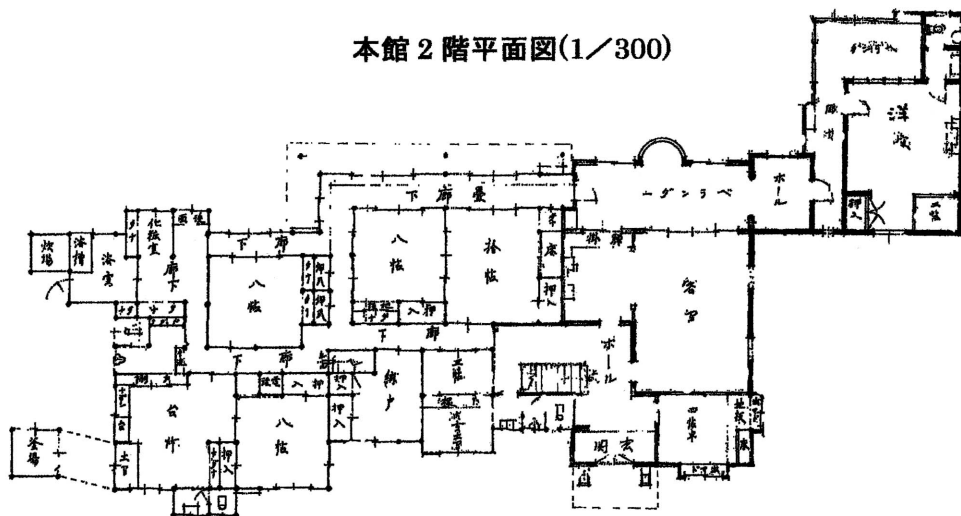
かたせ写真館 撮影



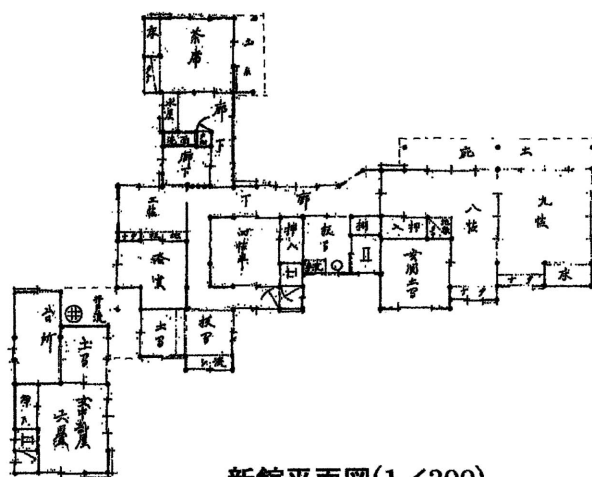
左：現在の新館、同じアン
グルから。



本館 2 階平面図(1/300)



本館 1 階平面図(1/300)



新館平面図(1/300)

菊本家鵠沼御別邸内各建物平面図（原本は1/100）より抜粋

菊本別荘年譜

- 1912年 大正元年 11 月 28 日、伊藤幹一より別荘敷地を購入
- 1914 大正 3 年 10 月 24 日、直次郎、大阪より本店営業部長に栄転
この前後頃より別荘建築に取り掛かったか？
- 1918 大正 7 年 1 月 22 日、直次郎、常務取締役 報酬月額 700 円
この年には本館、新館ともに完成していたようである。
- 1923 大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災、本館、新館ともに倒壊する。復旧は
直ちに着手された模様である。
- 1924 大正 13 年 3 月 28 日、直次郎、欧米印度南洋方面視察に出発。
- 1925 大正 14 年 2 月 10 日帰国する。同年、2 月 26 日（旧暦 1 月 15 日）呉
昌碩、三宜荘の扁額の揮毫する。
- 1932~43 昭和 7~18 年の間に「菊本家鵠沼御別邸内各建物平面図」を作成。
- 1944 昭和 19 年、直次郎、ひさ夫妻は郷里、伊賀上野へ戦時疎開をする。
- 1945 昭和 20 年 5 月 25 日、東京大空襲で南青山の本宅が罹災する。東京で罹
災した長男保夫の家族、次男俊二の家族と家族を疎開させ単身残ってい
た三男健三が鵠沼に移り住む。以後、定住用途に使用されることになる。
- 1946 昭和 21 年 8 月、進駐軍より本館接收の通告を受け、本館を明け渡すた
め長男一家は鵠沼中岡に、次男一家は伊賀上野に、三男は別館に移った。
- 1947 昭和 22 年、長女喜美の家族が新館に移住する。
- 1952 昭和 27 年、敷地の南西部約 600 坪を売却。
- 1953 昭和 28 年、接收解除、本館返還される。
- 1954 昭和 29 年、敷地の北側約 1,650 坪を本館建物とも東急電鉄および五島
慶太に売却。
- 1957 昭和 32 年、直次郎、伊賀上野にて死去。
- 1959 昭和 34 年、妻ひさ、三男健三の家族が鵠沼に移り住む。
- 1974 昭和 49 年、ひさ、鵠沼にて死去。
- 1978 昭和 53 年、敷地の東側約 900 坪を森ビル開発株式会社に売却。



注：別荘敷地面積について菊本家では 5,000 坪といわれていたそうだが公図の記
載面積の集計、敷地図の求積、住宅明細地図の求積、航空写真の求積等を試
みた結果いずれも約 3,800~3,850 坪前後の数値となったので 3,800 坪余と
表示した。（文責 おかだ てつあき）

菊本別荘のこと

新田 貴代

現在は松が岡 1 丁目 11 番の地名を持ち、菊本、入江、新田の住居のある所は、かつて菊本別荘と呼ばれていた広大な敷地の「最後の一滴」とも言える場所である。私たちの祖父、菊本直次郎が鵠沼に別荘を購ったのは大正の初めであつて、関東大震災の 9 月 1 日には、折しも夏休みで東京の本宅から避暑に来ていた私の母と伯父たちは、ここで被災している。その時の話は母（喜美）から幾度となく聞いているが、家族に犠牲者はなかったものの小間使いの若い女中が心臓発作で死んだこと、建物は別荘番の住んでいた粗末な住宅を除いて、本館も藁葺の茶室も倒壊したこと、今は大曲と呼ばれている四つ角の傍の松林で犠牲者を焼く火が何日も燃え続けていたこと、江ノ電の鵠沼の駅から海に向かう道の右手に煉瓦作りのドイツ人の別荘があり、一家全員が犠牲になったために長いこと実体が分からなかったと云うような恐い話も、子供心に鮮烈な印象として残っている。

鵠沼が当時の面影を偲ばせる風景や建物を一つずつ失いつつある今、或る別荘の辿ってきた歴史と、そこでの生活を語ることは、鵠沼の昔をご存じない方にとって興をそそられることもあろうかと、その一端を書かせて頂こうと思う。

別荘での夏の生活（震災後から終戦まで）

昭和 7 年生まれの私には、別荘での初期の生活は祖父母や母の話しや、残っている写真などから想像するより他はない。祖父はこの別荘を夏の住居としてだけではなく、大切な客を饗応するのに使用していたらしい。その一人に呉昌碩（1844-1927）がいるが、彼は清朝末から中華民国初期の中国画壇を代表する画家であり、書家としても当代の第一人者と言われた人である。彼が歓待へのお礼として祖父のために画いてくれた画幅は今も菊本昭一の所にあり、扁額は、当時のままに残されている日本家屋の長押に懸けられている。「三宜荘」と書かれているこの扁額は、当時ここから富士山と江の島と龍口寺が一望できたことに由来している。為書

の日付を見ると乙丑（1925）とあるので、呉昌碩の晩年の貴重な作であることが分かり、その後に、この日本家屋が三宜荘と呼ばれるようになった由来を示すものでもあると、祖父母からも聞かされている。

大正の初期に鵠沼が別荘地として売り出されたとき、松を植えることが条件であったことは現在では忘れられてしまっていて、毎日のように何処かで、このようにして時をかけて成長した松が惜しげもなく伐り倒されている。私の母の少女時代には、こうして植えられた鵠沼の松は未だ丈が低かったようで、敷地の高台に建てられていた本館の二階からは、海岸で遊んでいる人々の様子がよく見えたと云う。お昼の食事の用意が出来る頃になると、女中が二階から旗で合図を送り、それを見て母たちは浜遊びを止めて帰ったとのことであった。

また今日では想像も出来ないことだが、当時の江ノ電は手を挙げれば何処でも停車してくれたそうで、こんなことも牧歌的な時代を窺わせるエピソードであろう。その他の乗物としては人力車があり、江ノ電の鵠沼駅わきの山上商店には数台の人力車が常に客待ちをしていて、祖母はよく利用していたそうである。

私自身にとっての鵠沼は、楽しかった子供時代の思い出と強く結びついている。夏休みを祖父の別荘で過ごすのが私と妹、そして大勢のいとこたちにとっても毎年の慣わしであった。祖父母の本宅は、昭和 20 年 5 月 25 日の空襲で焼失するまで現在の根津美術館の隣にあり、伯父たちや私の両親も青山近辺に住んでいたが、いとこたちとは祖父母の誕生日や新年会に会うだけで、一緒に遊ぶ機会は殆どなかった。それだけに鵠沼での夏休みは、皆で過ごせる得がたい時間でもあり、一年に一度のお祭りのようなものだった。

避暑地鵠沼での思い出の最初の 1 ページは、車窓の右手に大船の観音様が見える所から始まる。その時のわくわくする思いは、東京の日常生活から解放されて、これから始まる楽しい日々への期待感から生じたものでもあったろうか。母は私たちを送ると、東京から連れてきた女中二人に私たちを託し、東京に帰っていくことも多かった。他のいとこたちも伯（叔）母がそれぞれ自宅から女中を連れてきていて、彼女たちが別荘番を助けて食事作りや掃除、各家族の洗濯などの雑用をこなしていた。部屋割りには毎年ほぼ決っていて、私たちはいつも本館の二階に泊まったが、一番上の伯父の所は別格で、台所もお風呂も女中部屋もある新館と決っていた。他のいとこたちは、前に桃畑のある別館か本館に泊まっていた、三家族か四家族が一緒

に夏を過ごした。夏のこの時期に、祖父母が鵠沼に滞在した記憶はないが、私の両親は週末になると鵠沼に来て、休日を私たちと過ごすのが常であった。なお本館の西側にあるベランダ付洋室部分は、祖父母の居室で、孫たちの入ることの許されない聖域であった。そこに通じるホールには、祖父母の彫像が置かれてあって、私たちは朝晩の挨拶だけではなく、食事の前や後には「おじい様、おばあ様、いただきます」「ご馳走さまでした」の挨拶を欠かすことはなかった。

東京では寝起きの悪かった私だが、不思議と鵠沼では、朝早くすっきりと目が覚めた。朝食前に台所で長い棒状のお麩をもらうと、池の鯉の所に駆けつける。足音を聞きつけ沢山の鯉が群がって、お麩をねだるのを見るのが楽しみであった。朝食はそれぞれの家の女中が用意した食事を、別々に摂ったが、昼食と夕食は原則として本館の一階和室で一緒に頂くことになっていて、合図の銅鑼になると、皆が一斉に祖父母の彫像の前に走って行って挨拶をする様子は壮観であった。午前中は宿題や勉強をするように母から命じられていたが守られるはずもなく、朝食後は、年下のいとこたちと鵠沼海岸での浜遊びに時を忘れる毎日であった。

当時は鵠沼海岸で泳ぐことは固く禁じられていて、海水浴をする時は船頭さんが付き添い、境川の船着き場から和船に乗って片瀬海岸まで行った。裏門を出てすぐの川縁に船着き場があり、そこには大小さまざまな蟹が群れていて、泡をぶくぶく吹きながら鉾を振り立てていた。あの大量の蟹は一体どこに消えてしまったのだろうか。川縁を歩きながら、昔を思うことしきりである。船で片瀬海岸まで行く時は、船頭さんの他に女中も同行して、昼食やおやつ世話をしてくれた。魔法瓶に入れた麦茶、海苔で巻いたお握りと簡単なおかずが美味しく、食の細い私も女中が驚くほど沢山食べた。

おやつには東京から持参したゴーフルやリーフパイの他にも、別荘番が作ってくれる野菜入り蒸しパンやお焼きや、この近くで採れる細いさつま芋の蒸したものが珍しく、また動物の形をした小さなビスケットも人気があり、鉢に盛られたのを目を瞑って取り、動物合わせをして遊んだりもした。

週末になると早めに入浴を済ませ、浴衣を着せてもらって、私たちは東京から来る両親を鵠沼駅まで迎えに行った。いとこたちが一緒にの時などには、次に来る電車が普通車両なのか、花電車か、納涼電車かを当てっこしたりもした。おそらく週末にはサービスの意味で、特殊車両を走らせていたのであろう。このような日の夕食は大人と子供は別々のテーブルで、食後のスイカも、大人には半月型の大きいのが

出され、子供にはいつも通りの小さく四角に切った数片がガラスの器に盛られていて、早く大人になって半月型のスイカを食べたいと真剣に思ったものである。夕食後は庭で花火をしたり、皆でトランプやゲームをして遊んだが、私はそのような時や雨の日などには、本棚から好きな本を抜きだしては、中二階のお気に入りの場所に上がって行った。富山房から出ていた美しい装丁の模範家庭文庫が書棚にはあり、杉谷代水の流麗な筆になるアラビアン・ナイトなどに時間を忘れて読み耽ったことを、今懐かしく思い出す。

鵜沼での生活で特に印象に残っている出来事と言えば、江の島の沖での鰯釣りと、灯籠流しであろうか。鰯釣りは、境川の船着き場から船頭さんの漕ぐ船で江の島の沖まで行き、そこに船を止めて釣竿を垂れる。餌を付けるのは船頭さんがやってくれて、私たちはただ竿を上げるだけの邪道とも言える釣りであったが、竿を上げれば鰯が必ず掛かっていて、形容し難い快感を味わった。また釣ってきた鰯を手早くさばく船頭さんの手元を、私たちは驚嘆して眺めたものである。灯籠流しは、お盆の行事の一つとして行なわれていたが、船で境川を片瀬に下るあたりから、灯の灯った小さな灯籠が無数に水面に浮かび、屋形船からは僧侶の読経の声が聞こえてきて、無常観とも幽玄とも言い得る情調に包まれるのであった。そして灯籠流しの行事は、私たちにとって楽しかった夏の終わりを意味するものでもあった。

戦争が激しさを増してくる頃には夏休みをのんびり過ごす余裕もなくなり、鵜沼の別荘は、祖父母が疲れを癒すために数日を過ごす場所となった。それまでの別荘番に替わり西村喜太郎、多喜子夫妻が鵜沼を預かり世話をすることになったが、西村氏はコックをしていたこともあって料理が上手で、植木の手入れの心得もあり、大勢の人を雇うことの出来ない時世に別荘番としての多方面の仕事を良くこなしてくれた。食料の不足しがちな時代だったが、当時庭に沢山でいた松露や池に棲息していた食用蛙などを使って、祖父母のために立派な食卓を用意してくれたと云う。

昭和 20 年 5 月 25 日に東京の山の手一帯は激しい空襲に見舞われ、青山の祖父母の本宅を始め、伯（叔）父たちの家も私の家も全焼した。祖父はその時期京都の別宅に滞在していたし、祖母は既に 4 月に私の母と私たちを連れて郷里である三重県の上野市に疎開していた。東京でその夜に罹災した伯父たち三家族は鵜沼に移り、すでに家族を愛知県に疎開させていた伯父一人と共に、ここで終戦を迎えることになった。

その後の別荘の運命（接收と分譲）

終戦後の鵠沼での伯父たちの生活は、大変だったと聞いている。二番目の伯父夫婦は病身だったし、三番目の伯父は家族を疎開させ独り身であったので、皆が一緒に本館で生活し、それまで家事などしたこともなかった伯母が九人の食事の世話をしていた。いところから聞いた話では、海水を汲んで煮つめては少量の塩を作ったりもしたそうで、万事が不如意の中で、東京に通うようになった伯父たちや子供たちのためのお弁当まで作っていた伯母の苦労は、並大抵のことではなかったであろう。

進駐軍から本館接收を告げられたのは21年の夏であったが、その前から軍は準備を進め、めばしい住宅をマークしていた。何度かの調査の際には、必要な家具類などを全てチェックしていたそうで、伯父たちは彼らが要求する家具全てを残し、一週間で立ち退かなければならなかった。長男だった伯父の家族は鵠沼の中岡に、二番目の伯父夫婦は伊賀上野に引っ越したが、三番目の伯父のみは邸内の別館に移って、食事の世話は西村夫婦がすることになった。

私が鵠沼に住むようになったのは、22年の3月頃であったと記憶する。終戦を伊賀上野で迎えたのち、私たち一家は鎌倉に居を定めた。その翌年の21年5月に父は病死し、夫を失った母を気遣い、祖父は私たち三人を京都に引き取ることを考えたが、母はその提案を拒否し鵠沼に移る道を選んだ。私たちが茶室つき新館に引っ越して来た時、すでに本館にはA大佐が住んでいた。A大佐には妹と同じ年頃の男の子が一人いて、よく二人で池の鯉に餌をやったりしていたが、親から言われていたのか、家には一度も遊びには来なかった。

23年にA大佐は帰国して、B大佐が本館の新しい住人になった。その当時としては珍しいことだったが、彼は黒人の将校であった。独身であった彼にはマリコと云う日本人の愛人がいて、彼女の身内が住み込みで働き、一族が彼女を取り巻くようにして生活していた。父親はボイラーマンとして、母親は家政を取り仕切る女中頭として、姉はメイド、兄弟はボーイと云ったような具合であった。しばらくして大佐はアメリカ本国から母親を呼び寄せ、母親は鵠沼で一年余りを過ごし帰国した。この母親に私たちは大変世話になったが、それは次のような事情からである。

当時、私の母は父の死後の心労と無理が重なってか、湿性関節炎にかかり病床から一歩も離れられないほどの状態になっていた。そのことを知ったB大佐の母親は

関節炎によく効くからと、色々な薬や湿布薬などを持参しては、母を見舞ってくれた。また自分は湿布が上手だからと、手際よく湿布をしてくれたりもしたが、そんな彼女を見て、私は「風と共に去りぬ」の中に出てくる黒人の乳母を思い出すのだった。そのような折に、彼女は息子がどんなに優秀であるかを自慢すると同時に、黒人が白人社会の中で出世する困難さをも語った。また家の中の特殊な状況が様々な害をもたらしている実体を、涙ながらに訴えるのだった。自分は戸棚に鍵など掛けたくはないが、大事にしている品が紛失すること、食料品の消費量が膨大で、定期的に訪れるマリコの姉の夫が外に持ち出していると思えないことなどであったが、当時の日本の社会状況下では強ち彼女の被害妄想ではなかったであろう。

B大佐は週末に部下を招いてパーティを催すのが常であり、そのたびに誘われて数回は私も出席したが、黒人ばかりで白人は一人もいなかった。そんな折の料理は大佐の母親が采配を振るい作っていたが、アメリカ人家庭の均一化されたパーティ料理とは違う独特の美味しさがあり、温かさがあった。その後も多くのアメリカ人の家庭に招かれたが、B大佐の母親が作ってくれたような料理を出されたことは一度もない。

25年になって白人のC大佐が本館に住むようになった。気さくな人柄で客好きであった彼の所には、沢山の兵隊が出入りしていたが、黒人は一人もいなかった。招かれて出席したパーティは、唯お酒を飲んで騒ぐというだけのものであった。B大佐の時には周囲に日本人が多かったせいか、土足で家の中に入ることはなく、客もスリッパに履き替えていて、家の手入れも行き届いていた。C大佐のパーティでは、大勢の兵隊が土足のまま高価な敷物の上でダンスをし、大佐の子供たちは廊下をローラースケートで走り回っていた。私は祖父の大事にしていた鶴沼の家が汚されているのを見るようで耐え難く、二度とC大佐のパーティには行かなかった。接待が解除になったのは、28年ではなかったかと記憶する。

24年の春頃には母の病氣も快方に向かい、その年の10月に母は川北智三と再婚して北鎌倉に移り、鶴沼は私と妹と女中の三人だけとなった。義父が25年から鶴沼に住むようになったのは、私たちを案じた祖父の頼みによるものと思われる。川北智三は大使館付武官としてベルリン滞在中にドイツで敗戦を迎え、帰国後は商事会社に勤務していたが、社交好きな人で、取り引き先のアメリカ人たちを、花の美しい時期には鶴沼に招待していた。桜や藤の季節、つつじや菖蒲の時期のカラー写真が

残されていて、美しかった庭の様子を思い出させてくれる。義父は昭和 53 年 11 月に亡くなるまで鵠沼に住み、私と妹を育て、私たちの子供を本当の孫のように可愛がってくれた。また 34 年から鵠沼に住むようになった祖母（ひさ）にも、孝養を尽くしてくれた。

祖父は 32 年 10 月に亡くなるまで祖母と共に郷里の伊賀上野に住んでいたが、年に数回の日本パルプの重役会には祖母を伴って上京し、そのような折には私たちの住んでいた鵠沼の新館に泊まった。夏の住居として建てられた新館は、外との境は障子だけで冬は寒く、決して快適ではなかったのだが、台所が近くて料理を熱く供することが出来たためか「秋刀魚の塩焼きは鵠沼が美味しい」と言って喜んでいた。

27 年には経済的な理由から、祖父は鵠沼別荘の内、南西側の池と茶席を含む約 600 坪を小島孝徠氏に売却した。幸いなことに、ここは現在でも分譲されずに昔の雰囲気留めていて、鵠沼を紹介する写真にも幾度か撮られ、別荘地の面影を伝える数少ない場所となっている。

28 年に本館は接收解除となったが、29 年には本館を含む北側の土地（約 2000 坪と聞いている）も、東急電鉄と五島慶太氏に売却しなければならなくなった。その際に西村夫婦は裏門に近い別館 2 を贈与され、別館 1 および西村夫婦がそれまで住んでいた別荘番住宅と運転士部屋は台車に載せられ、裏門に通じる道を通って移築された。別館 1 は祖父が青山の本宅を改築した際に東京から移築したもので、この二間続きの座敷でかつて伯父たちや母の結納が執り行われた思い出ぶかい建物でもあった。別館 1 は池と藤棚の傍の見晴らしの良い場所に移され、祖父の死の 2 年後に伊賀から移ってきた祖母の終の棲家となった。この建物は現存するが、祖母の死後の分譲によって池も藤棚も姿を消してしまった今では、昔の面影はなく、すでに他人の所有となっている。なお本館の洋館部分は移築され、五島慶太氏がクラブハウスとして使用していて、祖母の存命中に川北の義父が車で祖母を連れていったということを聞いたことがあるが、その所在地は分からない。

昭和 34 年からは菊本昭一の父、菊本健三も名古屋での勤めを終え、鵠沼邸内に居を構えることになった。しばらくは空き家になっていた別荘番住宅に住んでいたが、その後に現在の家を新築して移った。

祖母は49年2月に鵠沼の別館で94歳の生涯を終えたが、晩年の15年間は、健三の妻（華）と娘である川北喜美に食事などの世話をしてもらって、穏やかな日々だったことであろう。鵠沼の邸内は以前にくらべれば狭くなったとは云え、縁側の前には藤棚もあり、色とりどりの躑躅が美しく、橋の掛かる池には五月に菖蒲、夏には睡蓮が咲き、築山も上の亭も残っていたので、日々の散策に不自由はしなかったであろう。桜の季節には花むしろを敷いて、曾孫たちとお花見を楽しんだが、そのような楽しかった一時の思い出は、私の娘の心だけではなく、沢山の曾孫たちの心にも残っていることであろう。

祖母が亡くなった後には、多額の相続税が相続者に課せられた。伯父たちの多くは亡くなっていて、いとこたちの代になっていた。いとこの中で将来鵠沼に住む意志を示し土地の相続を希望したのは、入江玲子一人だった。

そのような時に鵠沼の土地に興味を持ったのは、かつての湘南学園の同級生で家にも遊びに来たことのある森稔氏であった。彼は私の妹の夫と湘南高校でも同級であり、私の夫とは東大の駒場寮で同室であった。また彼の父で当時の森ビル社長であった泰吉郎氏は、私の実父と同窓であり友人でもあった。そのような縁で、東側の土地約900坪は、53年に森ビル開発株式会社に譲渡された。

入江はかつての別荘番住宅を移築した土地を相続し、夏の家として使用していたが、平成14年にこの建物は取り壊され、新しく建てられた家には今、玲子の長男夫婦が住んでいる。

義父が亡くなり母一人の生活が始まってからは、私たちは同じ邸内に家を建てることを考えるようになった。新館の女中部屋部分を壊し、母の住む隣に家を新築して移ったのは昭和55年の暮れであった。母は元気な晩年を過ごし、平成7年に85歳の誕生日を迎える直前に亡くなった。

鵠沼の別荘が一つずつ消えていくのは時代の必然であろうと、今これを書き終えて痛感している。もし昔の鵠沼の雰囲気少しでも残したいと思うならば、現状維持のための税制の改正等が必要であろう。松が岡から松の消え去る日が来ないことを、切に祈るのみである。

鵠沼の松伐り倒されて歳月の育てし景のまた一つ消ゆ

（にった たかよ）

別荘時代の思い出

菊本 昭一

私の記憶の中の鵠沼別荘は、幼稚園に入った昭和 15 年頃から終戦近い昭和 20 年の晩春までの僅か 5 年ほどです。終戦を境にわれわれの生活は一変し、もはや別荘を別荘として使う時代は過去のものになってしまいました。

当時、私ども一族は祖父の屋敷があった青山六丁目（根津邸、現在の根津美術館の隣）を中心に青山、霞町、隠田にかけて住んでいました。都会育ちの私にとって夏になると行く鵠沼の非日常的な生活は本当に楽しみでした。祖父の車で行くこともありましたが、普段は品川から東海道線に乗り、途中の大船駅で「鯛めし」を買ってもらい、藤沢から江ノ電の「鵠沼」駅経由で行きました。

単線電車で特有の金属製で真ん中に丸や四角が打ち抜いてあるタブレットを駅員さんが大きな赤く塗った機械に入れて、「一種丸」とか「二種三角」と叫びながらガチャガチャと機械を動かし、車掌さんと交換するのが面白く飽きずに眺めていました。鵠沼駅の半ば砂に埋もれた石段を上がり、砂の道を歩く時のあの微妙な感触はとても新鮮で楽しいものでした。また鵠沼駅前にあった大谷商店が焼くパンの香り、松の葉を燃す焚き火の匂い、久しぶりに人を迎え入れた家の中の独特の湿っぽさと黴臭さを今でも懐かしく思い出します。

子供の頃の記憶は断片的でスナップ写真を一葉一葉たどるようなもどかしさですが、とにかく何もかもが珍しく、楽しく、一日があつという間に過ぎたことを覚えています。祖父には 5 男 2 女があり、孫は私も含めて総勢 17 人で、それぞれの家族が女中さん数人を連れて三々五々鵠沼に来るのですから、数家族が重なるととても賑やかで、久しぶりに会ういとこ達と遊ぶのが楽しみでした。

祖父母や、父親、伯（叔）父たちが一緒なこともめったになく、どの家族も母親と子供たちだけだったように思います。生活は本館が中心でしたが、大勢の時には客室や離れも一部使っていました。子供たちは食事をするのも、遊ぶのも、入浴も、寝るのも一緒でした。朝起きると、先を争って祖父母の胸像が置いてある洋間のロビーに行き、「おじい様、おばあ様、おはようございます」、食事の前には「頂きます」、寝る前には「おやすみあそばせ」と挨拶するのが日課でした。

食事は住み込みの別荘番である N さん夫妻が女中さんたちを指揮して専門の料理人顔負けの見事な料理を作ってくれました。台所の前の竈部屋に、土製の竈が二つあり、ご飯や汁物などはそこで作っていました。子供たちは何ができる

か興味津々で、時々覗きに行っては叱られたりしていました。食事の前には「銅鑼」が鳴らされます。この音を聞くとどこにいても皆一目散に駆け戻りました。

子供にとって庭は迷うほど広く、ステンドグラスがきれいだった「ビリヤード場」、あちこちにあった「亭」、池にせり出した栈敷や太鼓橋、井戸水をくみ上げるポンプ室など、遊ぶ場所は沢山ありました。蟹や蛙、蟬、トンボやバッタなども沢山いました。池の鯉に餌をやるのも楽しみでした。台所の棚には棒状の「麩」の束が置いてあり、それを一本ずつ持っては池に行きました。庭には「マツバボタン」、「ホウセンカ」や「オシロイバナ」などが花を咲かせており、花びらを集めては爪、紙や布切れなどを染めたりして遊びました。

家の中では「双六」や「トランプ」をしたり、「かくれんぼ」をしました。家族が生活する部屋は良いのですが、木の扉に隔てられた正玄関や客室は暗くて怖い場所でした。特に頭のついたトラの皮の敷物がある洋間や、「寒山拾得」の大きな絵が掛けてある2階に行く階段の踊り場はとても怖かったのですが、背に腹は代えられずびくびくしながら隠れる場所を探したものです。

たまたま私の家族だけの時は、遊び相手のいとこ達がいないうれしさはありましたが、別荘番のNさんを独占できるのが嬉しいことでした。Nさんは本当に何でも良く知っていました。また、どこへでも連れて行ってくれました。和船のさおの扱いと櫓の漕ぎ方、生きたトンボを餌に食用蛙を捕まえる蛙釣り、浅瀬で足を使うハマグリ採り、時には江ノ島沖に船を出して「鰺」や「そうだ鯉」釣り、浜防風や松露採りなど、色々教えてもらいました。日が暮れてもまだ外で遊びたがると、「夕方になると片瀬川から河童が上がってきて腸わたを抜かれちゃうぞ」と叱られました。

* * *

当時、江ノ電の「鵠沼」駅から大曲を経て小田急線の線路を越した今の134号線の辺りは大きな砂山になっていて、砂山をよじ登るか、引地川あるいは片瀬川方向に大きく迂回しないと、波打ち際に出られませんでした。またそのあたりは潮の引きが強いので、「絶対に泳いではいけない」といわれていました。そこで海水浴は江ノ電で「西方」(現在の湘南海岸公園)駅に行き、そこから西浜に行くか、船で東浜(ひがしかたと呼んでいました)に行くことが多く、敷地内には船頭小屋があり、夏の間は船頭さんが待機していました。今は暗渠となり、知る人も少なくなりましたが、現在の松が岡2丁目の方向から別荘の中門(現在拙宅の門になっている)前の「藤ヶ谷橋」をくぐって別荘の中を通り、片瀬川に通じる用水があり、その落ち口に船着場がありました。そこから和船で行くのですが、こ

の道行もまた風情のあるものでした。当時は今のようなコンクリートの護岸もなく、芦原だったように記憶しています。途中左岸にはかなり大きな船着場と建物があり、そこでは何時も何かを大きな籠に入れて川の水で洗っていました。貝細工のための貝を洗っているのだと聞いたこともあります、本当かどうか分かりません。海岸では今の子供たちと同じように砂山を作ったり、水遊びをしたりしました。遊び道具は小さなシャベルとバケツ、ゴム製の浮き輪と波乗り板（30×60cmほどの木の板、今のサーフボードの原型みたいなもの）などで、今と違って魚や貝、蟹も沢山いました。地引網も楽しく、引かせてもらっては小さな魚を貰うのが楽しみでした。

祖父はこの別荘に政界や財界人、文人を招いて宴を催し、またご近所付き合いも色々あったようですが、勿論子供たちがそれに加わる機会はめったにありませんでした。それでも、お隣の各務さんやお向かいの高嶋さんのお屋敷にはたびたび行きましたし、一度だけですが正田家（日清製粉）の別荘に行つて美智子様たちと遊んだこともありました。五反田池田山の正田邸が母方の伯父の益田家（三井物産）のお隣だったこと、従姉2人が美智子様と双葉の同級生で、私も双葉幼稚園だったので良く存じ上げていました。

祖母に連れられて鎌倉山の長尾邸（わかもと社長、微生物蒐集・分類で有名な長尾研究所の創設者）のお屋敷に行つたこともあります。鎌倉由比ヶ浜と小田原板橋にあった益田家の別荘には良く行きましたが、鶴沼にも益田別荘があったことは最近まで知りませんでした。戦争中のある時期、各務さんのお屋敷に宮様（お名前は失念）が滞在されたことがあり、菊本別荘内の表門に上がる坂道の途中に尖った屋根の詰め所が設けられ、いつも剣付鉄砲を構えた衛兵が立っていたことを記憶しています。

その頃、井上さんのお宅のコンクリートの塀の途中の窪みに交番がありましたが、お巡りさんが結核で金盃に一杯血を吐いたと聞いてからは真っ暗な道にそこだけ赤い電灯が灯っているのがとても怖くて何度も夢に見ました。

いつもは初夏から初秋にかけての滞在でしたが、昭和19年の冬から翌年の春にかけて、当時祖父母も滞在していた鶴沼に母子4人で一時疎開したことがあります。夏のために建てられた別荘は夏だからこそ海風が涼しくて快適ですが、冬の寒さは一入で、食料も不足がちな中、わびしく過ごしたことを憶えています。当時通っていた、慶應義塾幼稚舎の宮下先生が湘南学園の園長になられたこともあって、転校のための面接まで受けたのですが、米軍が相模湾に上陸する恐れがあるとの噂が流れ、また高射機関砲の破片が客間の一部を直撃したこともあって、

沙汰止みとなり、愛知県で農場をしていた母方の叔父の家に疎開しましたので、その後は戦後住居をこの地に定めた川北一家をたまに訪れるだけになりました。

昭和 34 年、父は銀行を定年退職したのを機に、伊賀上野に居た祖母共々住居を鵠沼に移しました。私もこの年から昭和 40 年に結婚するまでの 5 年間で昭和 61 年以降今日までこの場所で過ごしています。

* * *

戦後この地の風物も人の暮らしもすっかり変わりました。当時は松も今ほど背が高くなく、春の緑摘みと剪定で、せいぜい 4～5 メートルぐらいに揃えられていて、松林の中は明るく、邸内の道も玉砂利に熊手の目が立ち、庭全体に手入れが行き届いておりました。今でも国分さんのお屋敷など何ヶ所かに当時の面影が残っています。戦後も 55 年を越え、手入れをしない松は、今のように亭々と聳え立つ大木になり、それも切り倒されるのを目にすることが多いこの頃です。

すっかり消えてしまったものに「松露」があります。菌糸は松と共生し、初夏には直径 2cm ほどのムカゴのような形をしたキノコになり、この辺りの松林のどこでも沢山採れました。中は真っ白なスポンジ状で香りも味も良く、吸い物やうま煮にすると絶品でした。松の樹齢とも関係あるのですが、昭和 40 年代の初めにはすっかり姿を消してしまいました。

用水が暗渠となると、池が干上がり庭の生物相も大きく変化しました。あんなに沢山いた蟹も、家の中を我が物顔に歩き回っていた大人の掌ほどもある大きな蜘蛛、何十匹も飛び込んで来たカナブンも見かけなくなりました。うるさいほど鳴く蛙の声もたまに聞こえるだけ、ウシガエル（食用蛙）の声はもう何年も耳にしません。夏から秋にかけて鳴く虫の声もめっきり減ってきたように感じます。

海も変わりました。砂山の代わりに、コンクリートの道ができ、大きな建物が建ちました。弘法麦や浜防風は姿を消し、浜豌豆や浜昼顔も少なくなりました。ハマグリはもう採れませんし、波打ち際に沢山落ちていた「さくら貝」や「寶貝」、大きな「はすのはかしばん」を見ることもなくなりました。

東京・横浜への通勤圏となった鵠沼は一握りの特権階級の別荘地から多くの人が住む住宅地へと大きく変貌しました。一時は高齢化が進みましたが、最近はや若い家族も多く住むようになり、路地に子供たちの賑やかな声がするようになりました。失われたものも沢山ありますが、形を変えて新しい世代に受け継がれたものも多いのです。風光明媚な、環境に恵まれた美しい鵠沼が、自然と共存しながら素晴らしい住宅地としていつまでも続いていくことを願っています。

（きくもと しょういち）

藤ヶ谷にあった高瀬邸について 母屋と離れの配置の一考察

伊藤 聖（会員）

かつて江ノ電の「柳小路」と「鵠沼」の間に「藤ヶ谷」という駅があった。江ノ電の車掌は「藤ヶ谷 藤ヶ谷 高瀬邸前」とアナウンスしたという。高瀬邸はのちに川袋の方へ移転したから、川袋の方が高瀬邸だと思っている人も少なくない。川袋の高瀬邸については『鵠沼』85号に狛倉健会員が書いているから、ここでは藤ヶ谷の高瀬邸について、その規模や建物配置を考察してみた。（以下敬称略）

航空写真に戦前の面影が残る

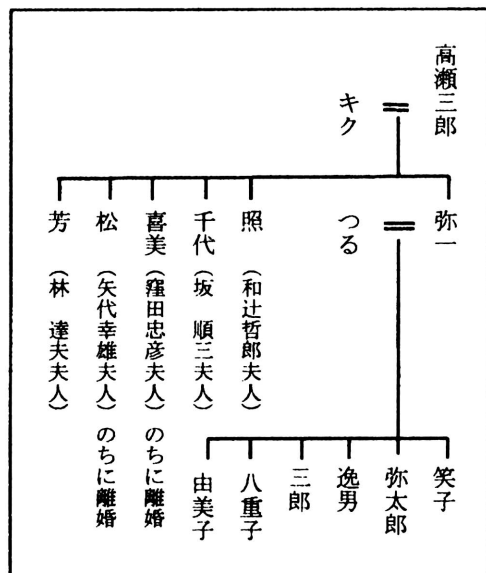
江ノ電が開通して間もない明治中期、高瀬三郎という実業家が、藤ヶ谷に数万坪の山林を求めて、そこに豪壮な家を建てた。この高瀬邸がいつ建てられたのか正確には分からないが、のちに和辻哲郎夫人となった三郎の長女照は次のように書いている。

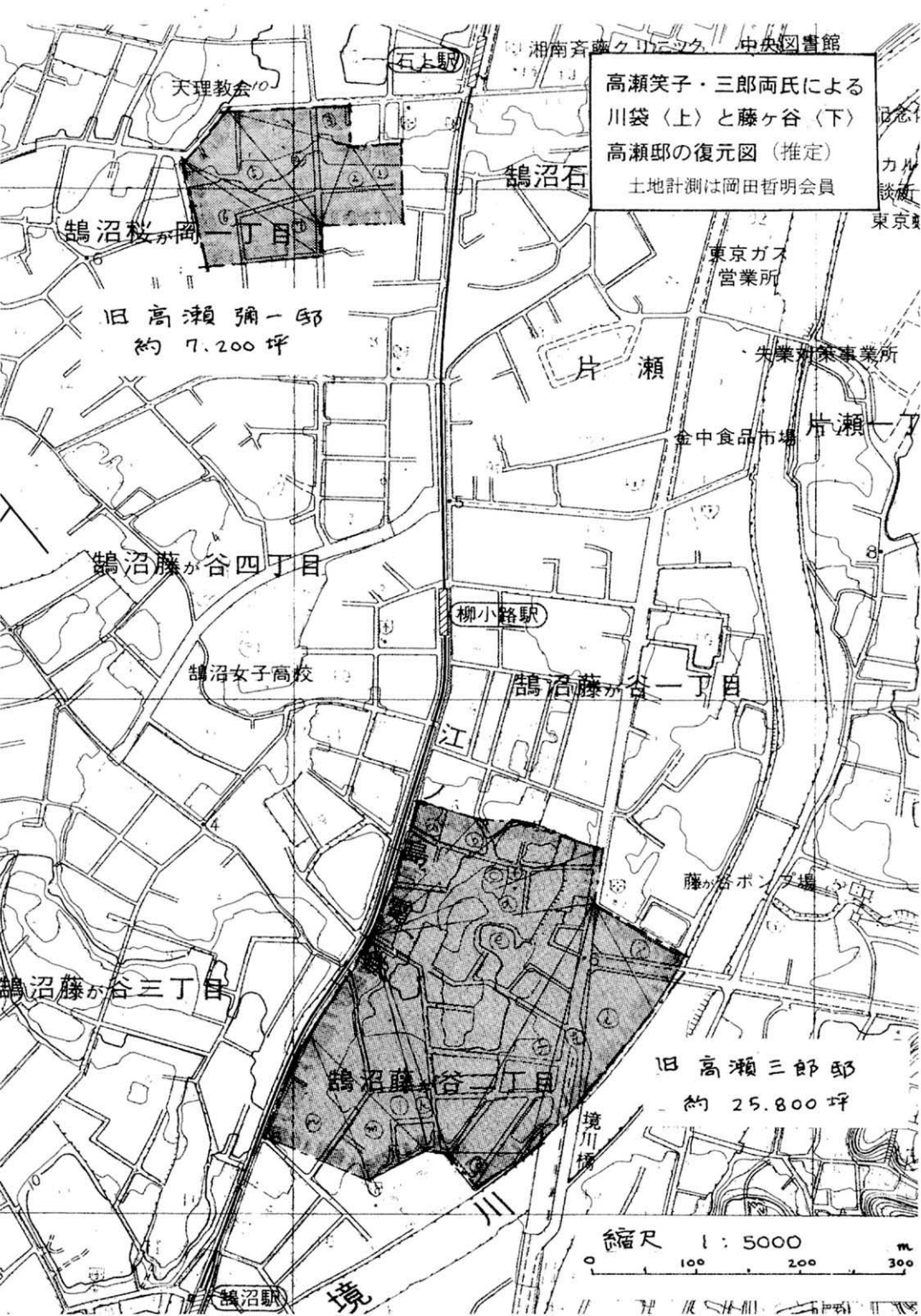
「父は貿易の仕事をしていたのだが、私が十五六の頃大きく商売に失敗し、横浜本町の店も鎌倉由比ヶ浜の別荘も、道具も調度も骨董品も、いくらか、価値のあるものは一さい、さっぱりと人手に渡してしまって、鵠沼の松山の中に引っ込んだのだった」

（『和辻哲郎とともに』）

照が「十五、六」ということは明治38年（1905年）か39年、つまり35年に江ノ電が開通して間もなくということになる。

和辻哲郎は大学時代と、照と結婚してからの二度、高瀬邸内の離れに住んだが、それがどの辺にあったか、正確には分からないままであった。哲郎から著書を贈られた夏目漱石は大正4年に「神奈川県鵠沼七千二百番地」宛に礼状を出しているが、この「七千二百番地」は、現在の「藤ヶ谷1丁目」と「2丁目」の大半にまたがる広い山林だった。「鵠沼御殿」と呼ばれたこの屋敷に、豪壮な母屋と、数軒の離れが点在していたのである。





石上駅

湘南育英クリニック 中央図書館

天理教会

高瀬笑子・三郎両氏による
川袋（上）と藤ヶ谷（下）
高瀬邸の復元図（推定）
土地計測は岡田哲明会員

鵜沼石

鵜沼桜が岡一丁目

旧高瀬彌一邸
約 7,200 坪

東京ガス
営業所

片瀬

失業対策事業所

金中食品市場

片瀬一丁目

鵜沼藤が谷四丁目

柳小路駅

鵜沼女子高校

鵜沼藤が谷一丁目

江

藤が谷ポンプ場

鵜沼藤が谷三丁目

鵜沼藤が谷二丁目

旧高瀬三郎邸
約 25,800 坪

境川橋

縮尺 1 : 5000
0 100 200 300 m

鵜沼駅

境

高瀬邸の離れには和辻のほかにも、阿部次郎、安倍能成、中勘助、茅野蕭々・雅子夫妻ら大正時代を代表する思想家・作家も滞在したが、その離れが邸内のどこにあったのか、まったく手掛かりはなかった。その糸口を与えてくれたのは『鵠沼』83号に掲載の「米軍撮影の航空写真」であった。

この航空写真は戦後、米軍が占領政策のために日本全土を約4万分の1で撮影したもので、鵠沼地区は昭和21年（1946年）2月15日に写されている。藤ヶ谷の高瀬邸が建てられてから、撮影当時すでに40年ほど経っていたが、戦前鵠沼の変遷は緩やかであったから、高瀬邸があった当時の面影を、そのままとは言わないまでも、かなりの程度に残していると考えてもいいであろう。

右ページ写真の高瀬邸の範囲をみると、いわゆる母屋と思われる建物のほかに、数軒の離れが認められる。そこで便宜上これらに、A、B、C、D、E、F（これは三越倶楽部であることが、本稿を書いているとき分かった）と記号をつけてみた。

冠木門から豪壮な母屋へ

まず、母屋について見てみよう。照は次のように書いている。

「待合所からゆるい長い坂を登ると、上にお寺のような門があり、門を這入ると左手の小高見の裾をめぐって母屋の玄関まで、一間幅の敷石が続いていた」

（『和辻哲郎とともに』）

また高瀬弥一の長女、笑子さん（米ミネソタ大学名誉教授）は、いまや藤ヶ谷の高瀬邸を知っている数少ない方だが、その著書のなかで次のように言われている。

「門に向って右に待合所、左に門番所があり、広い砂利道のだらだら坂を上ると、大きな威圧するような立派な冠木門があった。自分が子供だったからよけいに大きく思われたのだろうが、母屋は和風の広い客間、天井の高い広い建物、畳を敷きつめた一間廊下、大きな食堂のテーブル、二十脚の椅子などをぼんやり覚えている」

（『鵠沼断想』）

「畳を敷きつめた一間廊下、二十人が食事できる食堂、食器も和洋二十人前が揃っていた。家族が多いので部屋は沢山あったし、大きな台所、女中部屋、又、男衆のための家が別棟にあった」

（『ゆく河の流れ』）

藤ヶ谷停留所から砂利道の長いだらだら坂を登ると、左右の砂丘と高さを競うように、お寺のような冠木門がそびえ立っていた。その門から母屋までは一間幅の敷石の、やや右回りにカーブした下りになっていて、その先に豪壮な木造平屋建ての母屋があったのである。



この写真は国土地理院の承認を得て掲載しました。

和辻哲郎が卒論を書いた離れ

高瀬三郎の長男、弥一は旧制の第一高等学校で英法科、和辻哲郎は文科で、同学年であった。和辻が東大哲学科にいたころ「卒業論文を書くなら、屋敷の離れを使ってはどうか」と勧めた。こうして哲郎は明治44年11月から高瀬邸の客となり、食事は母屋と一緒にあって、離れで卒論の執筆に専念した。この離れは食事のことも考えて、母屋に一番近い写真のCであったと思われる。照は懐かしさを込めて、こう書いている。

「和辻は離れ家の逗留客となった。そして食事毎に母屋に通い、家族の者達と一緒に食卓についた。その頃私共の家族は、両親と長男の兄、長女の私の他、娘達が四人いた。このうち兄は東京の下宿屋にいたし、次女は女子大の寮にいた。末の方の妹二人は小学生で、お弁当の日が多かったせいか、思い出してみるその頃の昼の食卓は、ひっそりと静かなものだった。十畳一ぱいと思われる程大きな丸テーブルに、母と三女と私が並び、向う側一人はなれて客が坐った。深い軒からの柔らかい光を障子ごしにうけて、静かに膝も崩さずに坐っていた人の姿が、今もおぼろに目に浮かんで来る」

（『和辻哲郎とともに』）

「十畳いっぱいほどの丸テーブル」というのは、ちょっと普通の家では想像もできないが、高瀬邸の豪壮さを物語るものといえるだろう。

和辻がいた離れCは母屋の庭つづきにあった。『鵠沼断想』では「二万坪の邸内の母屋は大きく、離れの建物も夫々立派な一軒の家であり、母屋の前の庭につづき松山や梅林があり、また茶畑や野菜畑もあった」と書かれ、『ゆく河の流れ』では「庭に松山があり、小さな離れがあった」と書いてある。照の記述はいっそう詳細である。

「門からはいって右手の方には、やさしい形の小丘があり、裏側にまわって登ってゆくと、奥に六畳と八畳の簡素な離れ家があるのだった。その丘の松は大きくなかったので、梢ごしに下の広い桃畑の一部がみえ、春の花の頃はのどかに美しい眺めだった」

（『和辻哲郎とともに』）

松山にあった離れは「六畳と八畳」の二間^{ふたまた}だったことが分かる。母屋に近いことから食事の配慮もあって、のちに阿部次郎や安倍能成らが滞在したのも、この離れであったと思われる。

阿部次郎・安倍能成・中勤助がいた離れ

和辻が卒論を書き上げて高瀬邸を去ったのち、和辻の紹介で阿部次郎がその離れCにやってきた。大正3年5月のことで、阿部は東大哲学科で和辻の5年先輩だった。当時阿部は東京で大学講師の仕事があったので、離れに籠もりきりになることはできなかった

たが、断続的に約1年間ここに逗留して、のちに『三太郎の日記』の第二部となる著述に専念した。

安倍能成が妻恭子と長男^{※こと}亮を伴って離れCに住んだのは大正5年3月で、阿部次郎はすでに高瀬邸を去っていたが、後述するように和辻は別の離れBに住んでいた。したがって和辻と安倍はそれから2年間、同じ鵜沼の松林のなかを行き来しながら暮らすことになる。

安倍能成が和辻の紹介で高瀬邸に来たのは、妻の病後の療養というのが主な理由だったが、また長男が病弱だったので、海岸に近い保養地としての鵜沼に引きつけられたというところもあったようだ。

この能成が借りていた離れCのそばに、もうひとつの小さな離れDがあった。能成はここを書斎として使っていたが、そこに中勘助がやって来て、ひと夏を過ごした。後年になって彼自身が書いたものをみてみよう。

「三十年ほど前のことである。ひと夏私は脚氣の転地療養のため暫く鵜沼の家の厄介になった。確か^{※こと}亮ちゃんが二つぐらゐの時だらう。広い松林の中で、ひとつ屋敷うちとしてはかなり離れている閑静な二棟の一つ、書斎になつてはうを借り、食事と茶だけを住居のはうで一緒にすることにしてゐた」 (『亮ちゃんの思ひ出』)

ここで「ひと夏」というのは大正5年のことである。「ひとつ屋敷うちとしてはかなり離れている」の意味がはっきりしないが、「母屋から離れている」二棟ということなのであろうか。勘助の回想のつづき、

「また時には恭子さんとあまり遠くない川のはうへ散歩したり、旅館のあるはうへ駄菓子^{だかし}を買ひにいつたりした。恭子さんも私も駄菓子が好きなのだ。そんな時おぶつて歩くと揺籃^{ゆらん}と同じ効果があるのかちきに眠つた」 (『亮ちゃんの思ひ出』)

この「川」は高瀬邸の裏の境川(片瀬川)のことであろう。また「旅館」は東屋を指していると思われる。恭子との親しさが人々の噂になって、勘助は間もなく高瀬邸を出て、鵜沼海岸の借家に移った。この借家がどこであったかは分からない。

和辻が結婚生活を送った離れ

これより前、和辻は明治45年3月東大哲学科を卒業、高瀬照と結婚して、東京大森に新居を構えた。翌大正2年に長女京子が誕生、1歳半の可愛い盛りになったころ、祖父の三郎は手元に置きたくなつたのか、高瀬邸に来て一緒に住むように勧めた。こうして大正4年9月から哲郎は、照、京子とともに高瀬邸に移ってきた。笑子さんにも確認してもらったが、それは離れBで、母屋から150メートルも離れていた。

この離れについて、照は『和辻哲郎とともに』のなかで「ここに引き移って間もなくだったと思う。片隅に机と本箱を置いただけの、殺風景な十五畳の書斎に二人で坐って、『ゼエレン・キエルケゴオル』の奥附に判を押していた日があった」（注1）と書いているから、かなり大きな部屋があったと思われる。あるいは二間の仕切りの襖^{ふすま}をはずしてあったのだろうか。「十五畳の書斎」と正確に記述してあるから、それも疑問である。

この離れの北のほうに大きな砂丘があり、京子は毎日のようにその砂山に登って遊んだ。照の回想によるその砂丘の描写は細やかである。

「松山を出はずれた先の畑道——見える限りに家はなく、ただ一面に茄子^{なす}やかぼちゃの花が咲いている——そんな畑道を行くと、行く手に相当高く、視野一ぱいに広がって、馬の背のような形に、灰色の砂丘が立っていた。その可成^{かな}り急な斜面を登って行くと、一足ごとに足が砂にめり込んで、あたりの砂が柔かくサラサラと崩れた」

「頂上へ立って反対側の遠くを眺めると、広い畑の中の一本松や、その先の小松林や、小松林のかげに遠く小さく光っている海などが見えた。京子と私はそのてっぺんに坐って砂遊びをはじめ」
（『和辻哲郎とともに』）

反対側を眺めるといふのだから、登ってきた南のほうを振り返っているのであろう。当時高瀬邸から「遠く小さく光っている海」が見えたのであった。この砂丘の西側、江ノ島に沿った一角は、広い桃畑になっていた。のちにそこはテニスコートになった。

茅野蕭々・雅子夫妻がいた離れ

茅野蕭々・雅子夫妻も長女の療養のため、高瀬邸の離れに住んだが、それがどこであったのか、はっきりしない。病気（結核と思われる）療養という事情から、母屋と距離のある離れBかとも思われたが、笑子さんは幼時、大叔父の山口寅之輔（注2）をBに訪ねた記憶があるとのこと。そうすると離れC、Dの可能性がもっとも大きい。

雅子のエッセイ「鵠沼の家」（注3）から引用する。

「私達が鵠沼に住んでゐたのはもう余程以前のことである。

大きな幾万坪もある屋敷の中に、ぽつん、ぽつんと建てられた小さい借家の一つに住んでゐた私は「まるで公園の中に住むやうね。」と偶々東京から遊びに来る友達にうらやましがられたほど、大きな松や、種々の樹木に囲まれた住居であつた。従つて海岸に住むといふよりは山に住むといひたいやうに幽邃^{ゆうすい}な環境であつた。

藤沢の町からは直ぐ電車で行けるのであるが、都会生活に馴れた私達には、何かにつけ不便でもあり、あまり静かで寂しかった。殊に冬の海辺は、どこの家も戸をたてて空家ばかりが眼についた」

雅子がこれを書いたのは昭和 9 年であるから、もう遠い記憶だったのは道理であった。三高教授を辞して茅野蕭々が京都から東京に戻ったのは大正 6 年 4 月で、翌 7 年 3 月には、和辻も安倍も高瀬邸を去っている。したがって雅子が書いている「冬の海辺は、どこの家も戸をたてて」の寂しさは、大正 7 年から 9 年までの間の経験であろう。大正 10 年ごろには、高瀬家は藤ヶ谷から川袋に転居している。ここで高瀬一家は大正 12 年の関東大震災にあった。

その他の職人がいた離れ

笑子さんの『鵲沼断想』には「祖父の全盛時代には、和洋それぞれのコックもいて、外国人のお客さんも多かったそうである」と書かれている。また『ゆく河の流れ』でも「祖父の仕事の関係で外国人の客が多く、それを家でもてなすのが好きだったから、グランド・ホテルを退めたコックを雇い、又、南京町の中国人のコックを雇い入れたりした。そして娘たちや女中に西洋料理や支那料理を習わせている」と書かれているから、和洋のほかに中華料理のコックもいたことは確かである。

西洋料理のコックは離れ A に住んでいたようである。照が「小高見の上には小さい建物があってその時分はコックを住まわせてあった」と書いているからである。照が記述しているように、この小高見は門を入れて左手の砂丘であった。私は最初、この離れ A を「大門の側の二間」(注 4)の離れと思い、ここに阿部次郎や安倍能成が住んだものと勘違いしていた。笑子さんから「門の位置はもっと奥にあった」と指摘され、阿部らが住んだのは、その門から入って右手の、母屋に近い離れ C であることが分かった。

横浜の中華街から連れてきたコックは、短期間ではあったが離れ E に住んだという説もあるが、これは確かではない。また高瀬邸には大勢の庭師や大工も出入りしていたが、これらの「男衆」は門番所のそばに住んでいたという。

F は最初、高瀬邸の範囲に入っていると思われたので記号をつけたのだが、笑子さんは「三越倶楽部ではないか」といわれ、語る会の会員からも同様の指摘をうけた。三越倶楽部については不明な点も多く、今後の調査を期待したい。(いとう さとし)

(注1) 和辻哲郎の著書『ゼエレン・キエルケゴール』は大正 4 年 10 月に出版された。夫妻が東京から高瀬邸に移って 1 か月後である。

(注2) 笑子さんの祖父三郎の末弟で、松島苑の創設者。

(注3) 茅野蕭々・雅子『朝の果実』(岩波書店 昭和 13 年)に所収。

(注4) 小山文雄『個性きらめく 藤沢近代の文士たち』267 ページ。

福永陽一郎と

藤沢市民オペラ

【上】

会員 渡部 瞭



はじめに

福永陽一郎(1926-1990)

藤沢市は〈市民〉という言葉が好きな自治体のようだ。曰く、市民病院、市民図書館（総合・南・大庭・辻堂の4館。あわせて市立図書館の呼称も。他に各公民館に付随する市民図書室もある）、市民会館、市民センター、市民ギャラリー、市民の家等々、行政側がつくる施設名に多く用いられている。他市の場合には〈市立〉とか〈市営〉を用いるところを、藤沢市は〈市民〉と名付けているのだ。

これには一定のコンセプトがありそうだが、いつ頃から誰がという点については、残念ながら判然としない。

そして、市民の側が形成する組織や催しにも当然ながら〈市民〉という言葉が用いられるが、こちらはさほど際だって多いとはいえない。市民短歌会、市民交響楽団から市民まつりまで。こういった中でも、一際異彩を放っているのが〈藤沢市民オペラ〉だ。

今でこそ全国各地に〈市民オペラ〉と名付けられる催しが様々な形態で見られるが、その多くは1980～90年代にスタートし、それも1～2回の公演で立ち消えというケースが少なくない(もちろん、20回近い公演を継続しているというものも稀にはある)。そういった中であって、わが〈藤沢市民オペラ〉は1973年に旗揚げして以来、今秋のオフエンバック『地獄のオルフェ』（天国と地獄-藤沢特別バージョン）で30周年、18回を数える。そのいずれもがハイレベルで、これまで何回となくプロの演奏活動に肩を並べて、各種の表彰を受けている。

このような活動の継続は、藤沢市民の文化的レベルの高さを示すことはいうまでもないが、軌道に乗るには葉山^{しやん}峻^{しん}という政治家と福永陽一郎という音楽家のリーダーシップによるところが大きい。葉山は鶴沼^{くげぬま}で生まれ育ったが、福永はいわばよそ者だった。音楽愛好家の間では知られているが、知らないという方も多と思われる。ここではその福永陽一郎について紹介したい。

生い立ち ハレルヤ=コーラスで泣きやんだ赤ん坊

福永陽一郎は、1926(大正15)年4月30日、神戸市須磨区^{こうべ}で誕生した。父=福永^{たてあ}盾雄はメソジスト派の牧師として3年ごとに各地の教会に派遣されており、神戸の前は〈真宗王国〉といわれた石川県輪島や福井市、そして現在は朝鮮民主主義人民共和国^{アッセン}の開城の教会で牧会していた記録が残っている。

この時代の神戸は、関東大震災で破壊された横浜に代わり日本一の港湾の地位を獲得していた。主な貿易相手国だった米国は、第一次大戦で疲弊したヨーロッパ諸国^{しりめ}を後目に〈Rolling 20's〉の好景気時代の最中だった。こうした活況の中での神戸時代は、福永一家にとっても安定した〈佳き時代〉だったと思われる。

それに加えて父=福永盾雄にとって神戸は青春の街でもあった。関西学院神学部^{かんせい}に学んだ彼は、今年で創立104年を迎える日本最古の男声合唱団《関西学院グリークラブ》草創期のメンバーだった。音楽を愛し、当時はまだまだ珍しかった蓄音機を所有していた。電気式のいわゆる電蓄が開発されたのが1928(昭和3)年のことだから、あるいはそれだったのかも知れない。いずれにせよ、嬰兒時の福永陽一郎は、レコードをかけると必ず泣きやむという赤ん坊だったという。それがポリドール盤の《ブルーノ=キッテル合唱団》^{*}が歌うヘンデル『ハレルヤ=コーラス』とベートーヴェン『自然に於ける神の栄光』のカップリングS Pだったというから、恐れ入る他ない。

※ドイツの合唱団。Bruno KITTEL は指揮者の名。フルトヴェングラー指揮による《ベルリン=フィル》と共演したベートーヴェンの『第九』やモーツァルトの『レクイエム』など、歴史的な名盤を数多く録音している。

教会で育った陽一郎にとって、オルガンやピアノといった鍵盤楽器は、常に身近にあった。彼の言葉によると、「感覚的には、ものごころついた時には指の先に鍵盤があった」という。これは、幼稚園教育の専門家だった母に負うところが大きい。ここで、彼の母=福永^{つぎ}津義(ツギ・津義子^{ただのり}とも)について紹介しておこう。

津義は、1890年、徳永規矩・うた子の次女として熊本で生を受けた。父(陽一郎にとって母方の祖父)=規矩は教育者で、キリスト教主義の熊本英学校を興したが、肺結核で17年間も病床にあった。その中で不朽の名作『逆境の恩寵』を著し、1903(明治36)年、津義が少女時代に43歳の若さで天に召された。



晩年の福永津義

『逆境の恩寵』には次のような逸話がのこされている。

「ある日のこと、明日食べる米が一粒もなくなった時、見知らぬ人から米2俵をもらうことができた。しかし翌朝、その米2俵がそのまま盗まれてしまった。うた子夫人は嘆いた。子どもたちも泣いた。しかし彼は、みんなを枕もとに呼んで感謝しようといった。“まず見知らぬ人から米2俵もいただいたことを感謝するのだ。また、貧しいわが家にも人に盗まれるものがあつたことを感謝すべきだ。第3は、米は人に盗まれたが、わが家には誰ひとり人の物を盗む者がいない事を感謝したい。それから第4に、わが家には心の曲がつた者がいなくても、世間は曲がつていることを実物教育してくれたんだ！米2俵ぐらいは安いもんだ、感謝しよう。しかし、まだ感謝すべきことがある。第5に、何といつても感謝したいことは、この世の宝は人に盗まれるが、私たちは誰にも盗まれない、キリストにある神の宝、罪の赦しと永遠の生命を持っているということだ！感謝しよう”の言葉をかけたのだつた。」このように彼は、結核で17年間も床に伏せ、5人の子どもをかかえ赤貧洗うがごとき生活をしていたが、いかなる事態になつても感謝の心を失わなかつた。こうした家庭環境のもとで育つた津義に、どのような苦しい事態に陥つても前向きに進む姿勢が培われ、それが陽一郎にも受け継がれていつたであろうことは、想像に難くない。

母(陽一郎にとって母方の祖母)=うた子は12歳にして八代より新島^{やつしろ} 襄^{ゆする}の同志社に学び、夫=規矩召天の後、熊本女学校の教師と舎監を勤めながら5人の子どもを養育した。なお、ある資料によれば、「福永津義先生は、数々の名誉ある表彰を受けられましたが、文豪・徳富蘇峰^{そほう}、蘆花兄弟^{ろか}がご親戚であることも含めて、殆ど語られませんでした。」とある。うた子の旧姓は判らないが、徳富姓は水俣^{みなまた}・八代に多い。蘇峰、蘆花兄弟はの水俣出だが、若くして同志社に学ぶという共通点から、「ご親戚である」というのはうた子の系列と筆者は睨んでいる。

津義は、長崎活水女学校の幼稚園師範科^{かつすい}*を卒業後、母校の教師および付属幼稚園の主任教諭、続いて福井市の栄冠幼稚園の主任となり、ここで福永盾雄牧師と結婚、旧朝鮮の開城ホルストン女学校でも教師を務めた後、神戸で早緑幼稚園^{さみどり}を設立、賀川豊彦の知己を得ながらキリスト教保育の実践にあつた。

※活水女学校は1879(明治12)年に女性宣教師E. RUSSELLによつて創設されたメソジスト監督派系ミッションスクールで、幼稚園師範科は1887(明治20)年に開設された。1999年制作の創立120周年記念映画『わが心に刻まれし乙女たちを』には、在学中の福永津義(当時は徳永ツギ)が登場するそうだ。

さて、話を神戸時代の福永一家に戻そう。幼児期の陽一郎は、父の購入したレコードを食事も忘れて曲を覚え込むまで熱心にむさぼり聴いた。その姿を見て、父はヴァイオリンを習わせようと考えた。陽一郎4歳の時である。当時子ども用の4分の1ヴァイオリンは国産になく、輸入を待つ間にピアノを習わせることにし、増田 正という、関西で名教師として聞こえた人物のもとに通わせた。増田の門下には音楽家の市来崎義子や相愛大学名誉教授になるピアノの徳末悦子らを輩出している。後に大学で教えたこともあったらしいが、この当時は小学校の音楽専科の教諭だった。この増田 正のもとで、熱心にピアノと取り組み、期待がかけられるほどに上達した。7歳の時には大阪・三木ホールでピアノ演奏の初舞台を踏んでいる。よく父に連れられて関西学院グリーの公演に足を運んだ。

少年時代 父の死、そして福岡へ

1935(昭和10)年8月9日、父＝福永盾雄が天に召された。このことを機会に「将来、音楽を職とする気は全くないから」という理由で、陽一郎少年はピアノ練習をやめてしまう。しかし、音楽嫌いになったわけではないのは、関西学院中学部に進学すると早速グリークラブに加盟すると共に増田 正への師事を再開していることでも判る。

盾雄の召天後も一家は神戸に居住した。津義は、この年〈^{しょうえい}頌 栄保育専攻学校〉と改称した^{ほろ}頌 栄保母伝習所(現在の頌栄短期大学保育科)やランパス女学院保育専修部(現在の聖和大学教育学部幼児教育学科)で教鞭をとるようになった。

1916(大正5)年南部バプテスト派の宣教師＝C. K. DOZIER^{ドージャー}によって創立された福岡市の西南学院では、1940(昭和15)年に西南保母学院を開設するにあたり、ふさわしい人材を求めている。白羽の矢が立てられたのが、神戸での実績が高く評価されていた福永津義である。西南からの熱心な説得に応え、福永一家は1940年4月、住み慣れた神戸を後に福岡に移り住む。陽一郎少年は関西学院中学部から西南学院中学部に転校することになった。

軍国日本が日中戦争から太平洋戦争へと突き進む中に陽一郎少年の中学生時代はあるわけだが、彼の音楽への情熱はそうした時代背景に抗^{あらが}うかのように高まってゆく。ピアノ練習は高橋暁夫という師を得て続けられたし、翌年秋には《西南学院高等部グリークラブ》の定期演奏会にピアノ独奏で賛助出演している。また、1942年には《福岡市男子中学音楽連盟》を結成、演奏会を開催し、1943年にはミュージカル『護王太平記』の台本を自費出版、これに作曲して翌年春に西南学院演劇部により上演されるなど、まさに八面六臂^{ろっぴ}の活躍ぶりを見せる。

多分、周囲の級友は陸上(陸軍士官学校)よ海兵(海軍兵学校)よ、あるいは大学の理工学部よという進路を考えていたであろう時代に、陽一郎少年が望んだ進路は東京音楽学校(現在の東京芸術大学音楽学部)であった。その理由について、本人は「どうやら、いちばんラクに入学できそうなのが音楽学校らしいと見当がついた」と書いているが、よしんばそれが本心だとしても、それを口に出すことすらはばかれる時代だったに違いない。西南学院では米人宣教師はとうの昔に強制送還され、反戦の意志を表したり、宮^{きやうじやうようはい}城遙拝に批判的だったりする気骨のある聖職者や教授は、特高^{とっこう}に睨まれたり、獄中生活を余儀なくされた。こういう背景のもとで「ボクは音楽学校に進む^{あッぽ}」といつてのけた陽一郎は天晴れといわざるを得ない。音楽に対する並々ならぬ情熱と、真の勇氣に裏打ちされた行動というべきだろう。

とはいえ、東京音楽学校は「行きたい」と思ったから入れるというような生やさしい学校ではない。全国から腕に覚えの俊英が集まってくることは、今も当時も変わりはない。自分に東京音楽学校に入れる実力があるか、陽一郎は中学部長のはからいと伝手^{つて}によって井口基成教授^{もとまり}の門を叩いた。1944(昭和19)年4月、東京音楽学校本科ピアノ科へ一度の受験で合格する。

音校時代 シュトルム & ドランク

入学してみると、ピアノ科の同級生は18名だった。うち、園田高弘(→日本を代表する名ピアニスト)・高木幸三(→横浜国大名誉教授)・三浦 浩(故人、→桐朋音大教授)と陽一郎の4名が軍国教育のただ中で音楽学校を選んだ男子である。

よく、演奏会のプログラムや音楽雑誌の演奏者紹介に「誰それに師事し」という記述が、あたかもそれが礼儀でもあるかのように必ず記載されているのを目にする。陽一郎にとってそれは、強いていえば豊増 昇教授ということになる。しかし、そのレッスンは衝撃的なものであった。夏休みの課題にシューマンの『パピヨン』作品2を与えられ、十分に練習を重ね、最初のレッスンで全曲を自信を持って弾いた。教授の評言はたったひとこと。「君、そんなの音楽じゃないね。もう一度、やってらっしゃい。」

陽一郎は記す。「そのほか、ああもこうも無い。それでレッスンは終わりだった。どの部分がどう悪いから音楽ではない、とか、どこをどうすべきだ、とかの、いつさいの指示が無い。悪い部分の指摘も、修正の手段や方法も、目標をどこに置いたら良いかも全部、自分で発見するしかなかった。それまでの〈勉強のしかた〉が、どうやら全然あやまりであるらしいことは判った。」

しかし、このひとことは彼に起死回生の転機をもたらしたと陽一郎は述懐する。この辺が彼のただ者ではないところだ。

1945(昭和20)年3月10日。東京大空襲の日だ。下宿は丸焼けになり、陽一郎は福岡に帰還する。それを待っていたかのように召集令状が届いた。彼の生年である1926(大正15=昭和元)年^{きさう}遅生まれ、これが日本人として召集令状を受け取った最後の年齢だ。応召を前に自らのために『告別演奏会』を開催し、5月15日、佐賀の陸軍西部第194部隊に入隊して通信第2^{れんたい}聯隊に配属された。訓練兵の段階で内地にとどまり、前線に出ることはなかった。もっともこの時期は沖縄戦の最中で、内地そのものが前線になろうとしていたのだが。

小論は、福永陽一郎自身が、雑誌『あんさんぶる』に1979年8月から1980年10月まで、15回にわたって連載した自伝『演奏ひとすじの道』を太い縦系に、その他の資料を横系にして書きつづっている。その『演奏ひとすじの道』の冒頭は、1945年8月15日の記憶から始まっている。玉音放送を聴きながら、「またピアノが弾ける」と思ったというのだ。

そして、その機会は思いがけずすぐにやってきた。敗戦後も部隊は解散まで存続したが、疎開してあった器材を本隊に輸送するという残務整理しか仕事はなかった。輸送路の途中に国民学校があり、体育館兼講堂で兵隊たちはたっぷり時間をかけて休憩をとった。そこにはピアノがあった。福永二等兵が鍵盤に向かったのはいうまでもない。夢中で弾きまくる彼の演奏に、一人の熱心な聴衆がいた。クラシック音楽に飢えていた見習士官が、わざわざ陽一郎の演奏を聴くために同行するようになったのだ。彼の眼に光るものを認め、陽一郎は演奏とは聴衆あってこそものだという信念をここで自覚する。

その^{そうれん}瘦身が幸いし、軍医から病弱であると認められ、他よりも早く9月4日には復員することができた。その知恵を授けてくれたのは、かの見習士官だった。

福岡に帰ると、実家は6月19日の福岡空襲からかろうじて免れ、残っていた。母と姉(高橋さやか。母の跡を継ぎ、西南学院や西南女学院で教鞭を執り、九州幼児教育界の第一人者として活躍する)や妹はあいにく留守だった。彼は一人自室に入り、レコード盤に針をおろした。ラロの『スペイン交響曲』だった。身体の震えが止まらず、思わず泣き出してしまったという。

中学時代の音楽仲間は、この段階では誰一人帰郷していなかった。親友の安田保正と松丸二郎は戦死していた。福永陽一郎の作詞者としてのペンネームは、安田二郎である。

この安田保正の追悼コンサートを、保正の姉＝安田ヤス(ソプラノ。→福岡教育大学教授)とジョイントで9月30日に福岡で開催したのを皮切りに、10月と11月には熊本で、年を越して1946(昭和21)年1月8日に長崎で、それぞれその都市で戦後初の音楽会となるリサイタルを開いた。長崎の会場は山陰^{やまかげ}で原爆の直撃を免れた県立高等女学校の講堂だったが、ガラス窓は粉みじんに破れたままだだったという。さらに、1月から2月にかけて、尾籠晴夫^{おごもり}(ハイ=バリトン。→東京放送合唱団で活躍)とのジョイント=コンサートを尾籠の出身地である甘木市をはじめ、福岡・熊本・八代で開催している。すなわち、復員後半年足らずの間に、九州北部各都市で陽一郎の弾くピアノの音色は、敗戦にうち沈み、混乱の中にあった人々にひとときの安らぎと復興の望みを与えたのである。この時彼は、まだティーン=エイジャーだった。聴衆の前で演奏する緊張感は、「そのための準備が、東京の学校にもどれない私にとっての〈勉強〉になった」と本人は記している。

正月に帰省した福岡市出身で東京音楽学校同期入学の平井哲三郎(→指揮者・作曲家として活躍。早生まれのため兵役を免れた)から得た音楽学校の情報によれば、お茶の水の分校にあった畳敷きの邦楽練習場が学生宿舎として提供され、2月中に出頭して復学を申し出れば元来の学年に編入できるとのことだった。そういうわけで、早速上京、2月24日に東京音楽学校ピアノ科2年生に復学し、お茶の水の邦楽練習場に住めることとなった。

復学してはみたものの、それまでの価値観は180度転換し、加えて食糧難、未曾有のインフレという時代である。とても落ち着いてピアノのレッスンに明け暮れるなどということが許されるはずもない。まずは食うこと、これは音校生とて例外ではあり得なかった。唯一の例外といえ、音楽という稼^{いざ}ぐ術を持っていたことである。最も豊かな食事でありつけたのは、占領軍の隊内での演奏活動だった。その多くはジャズやタンゴ、ハワイアンといった軽音楽である。陽一郎にもジャズ=ピアニストとしてキャバレーやダンス=ホールを転々とする日々が続いた。そういった生活の中でも生まれて初めて本物のオペラ『カルメン』を鑑賞し、夏には福岡、秋には水沢でリサイタルを開いたりしている。また、ひょんなきっかけで《法政大学音楽部管弦楽団》の指揮者を引き受けることになった。

半年余りの陽一郎自身思い出したくもないという放浪生活の後、1947(昭和22)年3月21日、オーディションに合格し、近衛秀麿率いる《東宝交響楽団》(東京交響楽団の前身)のピアニストという職を得る。同交響楽団は、《藤原歌劇団》《東京バレエ団》と共に《東宝音楽協会》に包括されていた。

青年時代 近衛秀麿・藤原義江、両巨星のもとで

「近衛秀麿は、山田耕筰、藤原義江とともに日本の音楽がグローヴァルなものに進展する歴史の中の、第一世代の三大巨星だと思う。」と陽一郎は記す。

この3人のうち、2人までが日常的に身近に存在する環境が与えられたのだ。それは戦後の混乱期のまっただ中であるにもかかわらず、否、そうであるだけに濃密な関係が得られたに違いない。



近衛秀麿(1898-1973)

この当時、陽一郎は、自らのピアノ演奏の技能向上に、限界を感じ始めていたふしがある。周囲には、同期の國田高弘や、1級下の松浦豊明など、難曲をもの見事に弾いてのける俊英がいた。陽一郎の理想はあくまでも高かった。毎日仕事としてピアノに向かっていたが、音楽への情熱の強さに追いつかない自らの指の動きにいらだっていたのだろう。ある日、近衛に「指揮法をおならいたい」と申し出て、にべもなく断られた。

豊増昇教授のひとことが起死回生の転機をもたらしたと述懐し、自身を紹介するのに「私は、ついぞ今まで一度も、門下生というものを持ったことがない」と繰り返し書き、やはり同様に一度も教職につかず、個人レッスンの生徒を一人も持たなかった近衛秀麿や藤原義江の態度を高く評価していることから、次のような陽一郎の姿勢が読みとれるのではなかろうか。音楽家とは、否、真の芸術家とは、「誰それに師事し」とはいつてはならない。それは、誰その名声を利用して自らを高く見せようという姿勢だし、誰その傾向を受け継ぎ、誰その技量を越えられないことを表明するものだ。

指揮法指導の申し出を断った近衛秀麿は、1週間後に「指揮法は教えないが、助手にしてやるから、オーケストラの指揮に必要なことは、自分のそばにいて仕事をしながらおぼえなさい」と声をかけてくれた。職人の世界でいう「親方の仕事は見て盗め」である。これは陽一郎にとって願ってもないことだった。彼は心躍らせてピアニストと指揮助手の二足のわらじを履いた。

学校の方はどうだったか。戦後の態勢の中で、校長をはじめスタッフの総入れ替え状態があり、それは彼の眼に不条理に映った。新教授陣と対立したあげく、1948(昭和23)年1月、卒業試験の直前に退学願をたたきつけてしまう。

近衛秀麿の次のひとことが、彼を勇気づけた。

「君ね、日本の音楽学校の免状なんか世界で何の役に立つと思うのかね」

こうして、東京音楽学校を卒業直前で退学してしまった陽一郎だが、仕事の方には100%時間が割けるようになった。2月にはヴァイオリニストの鳩山 寛と『ベートーヴェン三大ヴァイオリンソナタの夕べ』を中国・四国地方の6都市で開催しているし、春からは藤原歌劇団の各歌手、ことにプリマドンナ＝大谷^{きよこ}洵子(→昭和音楽芸術学院校長)の独唱会の伴奏を数多く手がけた。東宝交響楽団の仕事としては、ピアノ＝パートの他にハープ＝パートの代役というのもあり、戦争で欧米と絶交していた期間の新作の本邦初演を手がけるのも刺激的だった。また、「私は最初の〈自分の〉合唱団を設立した。」とある。年譜によれば、《東京ヌーヴェトオール合唱団》、のちの《エオリアン＝コール》のことらしい。

福岡時代 インテルメッツォ

このように、充実した日々が続いていたが、1949(昭和24)年の夏、陽一郎は突然東宝交響楽団を退団し、福岡へ戻ってしまう。表向きの理由は、西南学院に勤めるという条件で、米国留学ができるという話に乗ったということになっている。

福岡へ帰るやいなや、8月に2回の『サマー＝イヴニング＝コンサート』を開き、石丸 寛指揮の《福岡フィルハーモニック＝ソサイエティ》に共演する。秋になると《福岡・筑紫野合唱団》の常任指揮者に迎えられ、やがてこれを《ユーフォニック合唱団》に改組し、さらに《西南カレッジイト＝コラール＝ソサイエティ》に吸収、発展させる。12月に『メサイア』を公演するためであった。

かたわら、生まれ故郷の神戸でコンサートを開催したのを皮切りに、指揮・独奏会・他団体への賛助出演・ジョイント＝コンサートなどで休む間もなくステージに昇っている。その間に《福岡歌劇研究会》を設立し、12月早々には『セヴィリヤの理髪師』を公演した。そして先述の『メサイア』である。

年明けて、相変わらず月1度は演奏会やオペラを公演し、4月からは西南学院大学神学部編入したが、演奏活動は続けられた。

このように、23～24歳の1年半にわたる福岡時代は、きわめて多忙で充実した日々だった。かつての東宝交響楽団の1団員ではなく、彼自身〈独裁者〉と呼ぶ、やりたいことがやりたいだけやれる環境だった。

また、^{きょうこ}暁子夫人ともこの時代に巡り会った。《ユーフォニック合唱団》のアルトだったのである。

しかし、陽一郎は記す。「私は実は退屈しきっていた。やることのパターンの先が見えてきたのである。こんなことをして何になる、という気持ちががつのるばかりであった。」

藤原時代 本格的オペラ指揮者へ

折りもあり、藤原歌劇団の福岡公演があった。演目は『椿姫』。Manfred GURLITT マンフレート グルリット 指揮の《東京フィルハーモニー》による本格的な公演だった。



旧知の藤原義江と宿舍や楽屋で話すうち、ついつい心情を吐露すると、彼は「そんなら出てこいよ。お前ならすぐ使ってやるよ。」とってくれた。

すでに予定されていた熊本でのコンサートを1月30日に済ますと、1951(昭和26)年2月5日に上京し、即座に《藤原歌劇団》に入団する。

その月末には『カルメン』の公演があり、以来、時に座付きピアニスト、時に合唱指揮者、時に副指揮者という立場で主に裏方の仕事をこなしていった。陽一郎が福岡にいる間に《東宝音楽協会》は解散し、《藤原

藤原義江 (1898-1976) 歌劇団》の経営は厳しい立場に置かれていた。

1951(昭和26)年11月5日、福岡の鳥飼バプテスト教会で暁子夫人と結婚、東京にて新生活をスタートさせた。

翌年、『アイダ』の公演をきっかけに、畑中良輔と共に《東京コラリアーズ》という日本初のプロの自立合唱団を組織する。《慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団》の出身者が中心メンバーだった。これをきっかけに、陽一郎の大学合唱団体との関係が次第に深まってゆく。このメンバーで鶴沼在住の遠山一(バス、本名：金井政幸→ダーク=ダックスのぞうさん)の自宅に遊び、この地がすっかり気に入った陽一郎は、10月、身重の暁子夫人と共に片瀬山の中腹に借家して新居を構える。暮れには一粒種の朋子ともこが誕生した。以来、数回転居したが、陽一郎の後半生は、ずっと藤沢市民だった。

これ以後、《藤原歌劇団》での活動は、当初青年グループの指揮を任され、数多くの日本初演を手がけている。グランドオペラの初指揮は1954(昭和29)年5月の『マノン』だった。そして1956(昭和31)年には30歳の若さで常任指揮者となり、その夏から4か月にわたる渡米公演をこなしている。また、NHK『イタリアオペラ公演』に日本側指揮者を4回任された。1964(昭和39)年に《藤原歌劇団》を退団するまで、27演目のオペラを指揮した。

[つづく]

※文中敬称略

(わたなべ りょう)

80年前の面影をたずねて

「於松」さんと鶴沼を歩く

佐藤和子（「鶴沼を語る会」会員）

「……佐藤別荘に越して間もなく、やがて“村娘於松之像”としてたくさんのお父さんの絵のモデルになったお松ちゃんのお母さんが、台所の手伝いに来てくれた。お松ちゃんの家は佐藤別荘のすぐ近くだった。お父さんは虎さんといって漁師を業にしている人だったが、お酒が好きでお松ちゃんのお母さんはそのため苦勞が多かった。お母さんがうちへご飯たきに来る時、お松ちゃんが一緒に来て私達は友達になった。はじめてお松ちゃんと遊んだ日のことを今でもよく覚えている。お松ちゃんは私より三つ年上で六つだった。私を連れて庭の方に通じている裏の松林の中に入り、松の根元に生えている松露をとってくれた……」（岸田麗子著『父、岸田劉生』より）

“村娘於松之像”として印象的な表情を描かれていたマツさんは、このようにして劉生の娘麗子と仲良くなって一緒に遊んだり、時には競い合ってキャンパスの前に立ちました。現在92歳で大変お元気、暖かなご家族に囲まれ藤沢にお住まいです。

画家岸田劉生は大正6年2月から大正12年9月関東大震災で家が潰れるまで鶴沼に住んでいました。この6年余りは「鶴沼時代」といわれ、画業の上でもひとときわ輝きを放った時期とされています。

かつての愛らしいモデル二人は以後音信不通でしたが昭和36年『週刊朝日』の誌面でマツさんの近況が報じられたのが切っ掛けとなり40年振りの再会となりました。麗子ちゃん47歳、お松ちゃん49歳、懐かしさ一杯、そのとき一人で鶴沼を訪ねて以来、マツさんは近くを車で通ることはあっても、思い出の地をゆっくり歩いたことはないとのこと、それでは……というので5月13日、「鶴沼を語る会」会員数人で案内方々、お話を伺う機会を持ちました。

・佐藤別荘跡地へ

劉生が結核を疑われて最初に静養のため訪れた所です。「絵を描くには光線の具合が悪いから……」ということで四ヶ月程の滞在でしたが、このときマツさんは近くにすんでいたこともあって岸田家との縁が始まりました。今回マツさんの記憶によりその場所は井上邸附近（松が岡3丁目23番あたり）というこ

とがはっきりしました。

佐藤別荘については1990年劉生の生誕百年を記念して開催された『麗子と鵠沼風景』展—市民ギャラリーにて—のカタログの解説でもその位置は不明とされ、これ迄の資料では佐藤長四郎本邸（松が岡2丁目1番あたり）を示しているものが多いようでした。けれども前記『父、岸田劉生』によると佐藤別荘は次に移った松本別荘より海に近いことになっています。佐藤長四郎本邸は芳藤園と呼ばれて江ノ電の鵠沼駅に近く、海からかなり離れていることもあって以前からこの佐藤別荘



鵠沼を歩く「松さん」

に関しては定かではありませんでした。それが今回マツさんと一緒に歩くことによって「当時の鵠沼郵便局の海寄り」という証言をいただき、現地でその位置を確認出来たのです。そしてすっかり変わってしまいましたが、マツさんのお住まいもかつての高木可三建具店の前ということでその位置がわかりました。

その近くに明治の終わりから大正にかけて若い女性読者を惹き付けた女流作家内藤千代子も住んでいたそうです。雑誌『女学世界』等に作品が掲載され「田舎住居の處女日記」「スイートホーム」等はこの鵠沼で生まれています。美貌の千代子に乗せて、馬の手綱を取っている男の人の写真を見て「あ、これ私の一番上の喜知郎兄さん（長兄の葉山喜知郎さん）」とマツさんはびっくり。「何しろあのころは大きなお別荘ばかりだったのに……すっかり変わってしまって隙間がなくなってしまった……」という言葉が印象的でした。千代子の家がマツさんの家と隣接していたことがわかりました。

・松本陽松園跡地へ

この松本別荘について麗子は次のように書いています。

「……松本別荘というのは、正面の小高い松林の中に大きな邸宅があり、門の前からずっと道ができていて、その両側の松林の中に点々と貸別荘があり、ひょうたん池があつたり、たいこ橋があつたり、築山があつたりして、なかなか凝っていた。真中の太い道の入り口に『松本別荘』と筆太に書いた表札が掛かっていた。

入口の門柱のすぐ右側の家が私の家だった。松本別荘の中の一番入口の家で、電車の停留所の方から来る道に面した所は、土が高く盛り上がっており、そこに松が生えていて自然の垣根になっていた。

松本別荘の大きな門柱を入ると両側は竹垣になっていて、所々に点在する家の小ぢんまりした門があったりした。そのじぶんはだいたい避暑に来る人とか、胸を患っている人が療養に来る土地柄だったので、どの家も三間か四間ぐらいの手頃な家の中で、私達一家が住んでいた家だけが母屋の他に洋館の二階建ての一棟がついていたのだ。洋館の一階が画室で、二階は書斎兼客間兼父の寝室だった。こうして狭くとも父は生家を離れてはじめて自分の仕事場を持つことが出来た……」（前出より）

この洋館はノッポの建物で昭和36年麗子ちゃん、お松ちゃんが訪れた際もまだ建っていました。（関東大震災では母屋は潰れたがこの洋館は傾いた程度だったので比較的早く元に戻ったという）「まーよー、正面にあった松本さんの山もなくなって、先生の家もこんなになってしまって（現在跡地に4軒の家が建っている）よく麗子ちゃんの家の前ひょうたん池やたいこ橋で遊んだのに……」とすっかり変わってしまった現在の姿に息をのんで立ちつくしておられました。そしてまた思い出を話してくださいました。

「このころ鶴沼尋常小学校に通っていてね、お弁当を食べて一時間ほでする丸山先生（劉生日記にも出てくる）が「葉山もう帰っていいよ」とおっしゃるの。喜んで早退して先生（劉生）の所に行きます。何時も「この辺を見て」と言うので、北側の窓の方を向きじっとしていました。でも布を敷いてあるだけの小さな木箱の上で正座しているので足が痛くなってね、動くとお松ちゃん、疲れただろう休もうか……」と一休みしました。このころは先生がどういう人かも分らず、太った優しい、よく相撲をとっているおじさんという感じだったのよ。そしてね、近所のおばさんが「ぜひうちの娘も描いてやってほしい」と頼みに来たの、そうしたら「誰でも絵になるというわけにはいかないんだよ」と言って断っていました。それを傍で聞いていて「どんなもんだい！」と嬉しくなったの。「あのころとしては珍しかった髷を結っていたからでしょうね。あの髷は母が毎日結ってくれたのね」と話されていました。

それ以上にあの丸い大きな目と、ふっくらとした赤い頬にも劉生は魅せられたのかもしれない。今は白髪ですがお顔の面影はそのまま、すぐに判ります。マツさんには、つわ藪の花を持った於松像を劉生からいただいた記憶があるそうです。「どこへ行ってしまったのか、こんなになるとは思わなかったの母がどこかへやってしまったのでしょうか」と笑っていました。残念です。

一連の麗子像、於松像の中で共に肩に掛けているショールがあります。（あのころ、残り毛糸を丹念に編んでこの様な肩掛や膝掛を作った）このショールはマツ

さんが他家（自宅の前にあった益田家）からいただいたものだそうですが、劉生が気に入って麗子にも掛けさせて二人でモデルをつとめています。絵を見ながら「先生はとてもいいねいね、ほら、ここが破れているでしょう。こんな所まできちんと描くんですよ....」。このショールを最近まで某氏が持っていたということで、夏子さん（岸田夏子・洋画家・劉生の孫、麗子の次女）が預かりマツさんに見せたそうです。ところが「違うのよね。あのこと松編みのショールは、残り毛糸で同じようなものをどこの家でも作っていたので、そこのお宅にもあったのでしょう。よく見るとやはり違ってね」ということで一件落着。それにしてもこれまで伺ってきたこと、大変な記憶力です。

・東屋跡地へ

東屋も幼いころの思い出の場所だったそうです。毎年お正月になると、子供達と呼ばれ、皆でお菓子をいただいて遊んだり。今のようにあらゆる物が氾濫している時とは異なり、この日の集まりがとても楽しみだったと話しておられました。あの建物や広い庭園そして池も跡形もなく、そこにはただ住宅が建ち並んでいる風景だけ、わずかに残る二階建ての建物と萱ぶき屋根のお宅（共に離れ）に当時の面影を偲び、感無量といった様子でした。

マツさんは七人兄弟の下から二番目、大正から昭和にかけて多くの人がそうであったように、13歳から26歳で結婚するまで他家へ奉公に出ており、鵠沼時代のことは時折思い出しながらも縁遠くになってしまった、ということでした。それだけに麗子さんとの40年振りの再会がどんなに嬉しかったことか.....。一緒に松本別荘を訪ね、そのころまで残っていたノッポの洋館を眺めて思い出を語り合い、本当に楽しかったそうです。「次は江の島で会いましょう」と約束したのに、翌37年麗子ちゃんはクモ膜下出血のため帰らぬ人となったのです。「やっと会えて、また次に会う日を楽しみにしていたのに....」あの日のお松ちゃんは、悲しみ一杯で麗子さんとの別れの式に参列したということでした。

マツさんは2000年（平成12年）岸田夏子さんのモデルとなり、80年振りに「村娘於松90歳に成るの像」として甦りました。そして現在は大正時代の鵠沼の様子を語ってくださる貴重な先輩でもあります。

本当にいろいろありがとうございました。（さとう・かずこ）

「鵠沼の緑と文化財を守る会」について

会員 中島 明

1. 「鵠沼の緑と文化財を守る会(略称・緑の会)」の設立

江ノ電「鵠沼駅」近く、松が岡 1 丁目の境川に接して建つ「渡辺邸」は大正から昭和にかけて、多くの文化人や実業家が居住した「別荘地、高級住宅地・鵠沼」を代表する貴重な建物であった。昭和 9 年に建設されたハーフティンバースタイルの洋風建築物で、日本建築学会の神奈川県近代洋風建築調査報告書にも、学術的にも価値あるものとして掲載されている。

この建物が、所有者の死亡により取り壊され、敷地を細分化して分譲されることになり、それを知った地元の有志たちが、何とか貴重な建物だけでも残せないかと、「鵠沼の渡辺邸と文化財を守る会」を結成して運動した。署名活動をして多くの住民から支持を受けて市長、市議会議長への要望書提出、議会への働きかけなど精力的に活動したところ、保存を行政も前向きに検討するところまでこぎつけたが、残念ながら所有者側の事情で急遽取り壊されることになった。

鵠沼地区には、まだ多くの古い昔の面影を残す屋敷(建物、庭園、外構)があり、渡辺邸は取り壊しの情報が遅かったため、折角の保存活動が実らず不調に終わった苦い経験を踏まえて、それら屋敷を初めとする鵠沼の歴史的環境が、最近の相続に伴う宅地の細分化で、変わりつつあることに「鵠沼の渡辺邸と文化財を守る会」幹事全員が危機感を抱き、引き続いて「鵠沼の緑と文化財を守る会」を平成 14 年 4 月に設立した次第である。

2. 「緑の会」の活動—以下、行事別に列記すると。

(1)会議 1,例会、原則、毎月第 3 日曜日午後 3 時より鵠沼公民館にて行う。

2.総会、平成 14 年 4 月 21 日(日)に第一回設立総会。

平成 15 年 4 月 20 日(日)に第二回総会を開催した。

3.幹事会、原則、月一回不定期で例会の前に午後 6 時より行う。

特に、最近の開発による緑の減少、住環境の悪化を鵠沼地区の住民はどう考えているか、「アンケート調査」を、「くらまち」主催「緑の会」共催で行うことにしたことをうけて、「くらまち環境部会」との合同会議を毎週のように開き、アンケートの内容や実施要領について夜遅くまで話し合った。

(2)アンケート結果報告会—平成 15 年 6 月 15 日(上)午後 1 時半より鵠沼公民館大ホールで、市民参加の自治組織である「鵠沼くらしまちづくり会議(略称・く

らまち)」と、鵠沼の住環境や景観について考える市民団体「鵠沼の緑と文化財を守る会(略称・緑の会)」が協力して、先に行った鵠沼の住環境に関するアンケート結果報告会を開催した。

アンケートは2月中旬より3月末まで1800枚配布し1012枚(回収率56.2%)の回答を得た。結果によると、「好きな鵠沼らしさ」の問に、多い順に(1)松の木の高木(2)別荘地であった面影(3)緑が豊か、などとなり、「鵠沼が抱えている問題」については、(1)土地の細分化(2)住宅の緑の減少(3)松の木の減少、が上位を占めた。「原因」としては、(1)相続税などの税金が高い(2)利益本位の開発行為(3)まちづくり制度など規制が整っていない、が多かった。

アンケート結果発表の後、コーディネーターの片桐氏から「鵠沼の特色は民地の緑であり、これが最近急速に失われつつあることに住民の人達が相当の危機感を抱いていることを強く感じた。問題はこれからで、いかに合法的な開発行為の中で緑を残していくかだ」と、緑の保存と開発を融合して成功した例として、直接関わった東京世田谷の「松蔭エコビレッジ」について紹介された。最後に満場を埋めた約200人の参加者の中から、活発な意見や質問、感想が出されて会場は市民集会のような熱気に包まれて、盛会裏に終了した。

(3)セミナー開催

- 1.平成14年1月19日(土) 鵠沼公民館「住環境と文化財について」。
- 2.平成14年4月21日(日) 鵠沼公民館「鵠沼の緑と環境を守るために」。

(4)勉強会開催

- 1.平成14年6月16日(日) 例会終了後 鵠沼公民館「緑の施策と、自然保護」
- 2.平成14年7月21日(日) 例会終了後 鵠沼公民館「用途地域、風致地区、開発行為について」。

(5)シンポジウム、フォーラム、説明会参加

- 1.平成14年5月16日(土) 足柄下郡真鶴町、シンポジウム「美しい都市(まち)を創るための基本とシステム」。
- 2.平成15年1月26日(日) 藤沢市労働会館、シンポジウム「湘南の邸宅文化を考える」。
- 3.平成15年2月1日(土) 藤沢市役所、説明会「風致地区条例改正に向けて」。
- 4.平成15年3月16日(日) 片瀬市民センター「藤沢市民まちづくりフォーラム」、終了後同所で3月例会を行った。

(6)現地実情視察、近隣説明会参加

- 1.平成 14 年 6 月 16 日(日) 7 月 21 日(日)、鵠沼地区の緑と開発の状況視察。
- 2.平成 14 年 7 月 21 日(水) 鎌倉市寺分「住民協定」について詳細を聴取。
- 3.平成 14 年 10 月 18 日(金) 藤沢市片瀬山「建築協定」について詳細を聴取。
- 4.平成 14 年 10 月 24 日(木) 藤が谷市民の家「近藤邸宅地開発」近隣説明会。
- 5.平成 15 年 7 月 18 日(金) 鵠沼公民館「岡本邸宅地開発」近隣説明会。
- 6.平成 15 年 8 月 23 日(日) 藤が谷市民の家「鳥居邸宅地開発」近隣説明会。

3.今後の「緑の会」の活動

(1)アンケート集計結果と報告会の PR。

- 1.住民に対して、これはと思われるお宅を戸別訪問して行く。特に昔からの広い土地を持つ家を訪問し、土地の細分化や旗竿開発を阻止して、緑の保全に努めるようお願いする。
- 2.開発業者や不動産業者に対して、個別にスケジュールを立てて訪問し、会の運動の趣旨に理解と協力を求め、「鵠沼」の価値を下げるような無茶な開発や売買をしないようお願いする。なお、この業者訪問は 9 月より行っている。

(2)会員の増強

会員は設立時 32 名だったが、この 9 月で 120 名に増加している。しかし、行政や開発業者及び地元住民に会の存在と活動を認めさせるためには、もっと多くの会員と、また活発に行動できる会員が多数いなければならない。残念なことに、現在活発に行動しているのは役員だけの僅か 8 名程度である。上記の住民に対する訪問活動で、緑豊かで良好な住環境を造るためには、他人任せにせず、自らがまず運動に参加しなければいけないことを強く訴えて、多くの人に入会を求める必要がある。

別に、文学散歩、史跡めぐり、バザー、餅つき大会、バーベキュー会、茶会、などのイベントを実施して広く住民の人達に参加を呼びかけ、会の活動を PR し、会の活性化と活動家の養成、しいては会員増強に結びつけたい。

(3)土地情報の早期キャッチと機敏な対応

開発行為の掲示板が出てからではもう遅いので、プライバシーに立ち入ることと難しいことではあるが、地区内に情報網を張り巡らせて、広い土地所有者の近隣居住者に、その所有者が、相続等で土地を売却しなければならない事情が発生した時は早く知らせてもらい、それを地区内の専門家に伝えて、専門家から所有者が適切な助言を受け、緑を残す開発をするよう説得する。

(4)地区計画の締結を呼びかける。

鵠沼らしい緑を残している地域にこれ以上無理な開発をさせないためには、町内会単位、街区単位の住民に呼びかけて、法律による「地区計画」を設定して、これからの開発や建物に規制や制限を設けることが必要である。

それは、具体的には(ア)敷地面積の最低限度(イ)容積率、建蔽率の制限(ウ)壁面の位置の制限(エ)建物の高さの制限、などである。これは、個人の所有権に関わることになり難しいことではあるが、時間をかけてじっくりと取り組み成功させたい。現に松が岡の町内会でこれ以上自分たちの住環境を悪くさせたくない、地区計画設定に向けての動きが見られるのは喜ばしいことだ。

5. 故川上会長の遺志を継いで

昨年3月13日(水)に急逝された故川上会長は、「緑の会」の前身である「鵠沼の渡辺邸と文化財を守る会」の設立発起人の一人であり、最近の開発に伴う緑の減少を憂えて、誰よりも熱心に活動していた。

昨年3月10日(日)の「緑の会」設立準備の最終幹事会には、体調不良おして出席し途中で倒れて病院に行かれたが、気分も良くなったとのことで、帰宅して翌々日の12日(火)に「鵠沼を語る会」の例会に病をおして出席され、帰りに自分で植えた松が岡公園の桃の木に会の名札を付けに行かれた。その夜8時ごろ、私の家に電話があり「中島さん、緑の会をよろしく頼みますよ」と言われた。私は前年末より体調を崩して「緑の会」の活動を休止していた矢先のことであったので「体も調子悪いし駄目ですよ」と消極的な返事をしたところ、「そんな気の弱いことを言われては困ります、ともかくお願いします」と再度言われたことが今でも耳の奥に残っている。次の朝、共通の友人である鈴木義治氏より川上会長の急逝の報を聞き、正に晴天の霹靂で、しばし呆然となり思わず「えーっ」と、絶句いたしました。私は、その亡くなる僅か数時間前の、「緑の会をよろしく」と言われたことを故川上会長の遺言として受け止め、以来遺志を継いで現在、「緑の会」幹事の一員として微力ながら活動しているが、今後も体の続く限りやっていく覚悟である。

また、そうすることで、芥川龍之介、岸田劉生、志賀直哉や武者小路実篤らの、文人たちが愛した昔の良き鵠沼の風情や面影を少しでも後世に残すことが、郷土史研究グループ「鵠沼を語る会」の一員としての使命だと自覚している。

会員の皆様には、今まで述べた「緑の会」の活動の趣旨にご理解ご賛同いただけるならば、是非ともご入会くださるよう切望する。

以 上

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成15年4月～平成15年9月)

総務委員会

平成15年4月例会 4月8日(火) 10時～12時 21名出席

- 議題1. 5月総会と役員選出について—有田会員に会長就任を要請することが承認された。その他の役員については、4月の運営委員会に一任された。
2. 郷土資料展示室について—第1回検討委員会は6月の予定
3. 会誌「鵠沼」86号の配布について—配布分担表に基づいて、会員、寄贈先の担当者を決めた。
4. その他 (1)「史跡めぐり」の件—去る4月1日(火)10時より。好天に恵まれ会員・その他で25名参加し中島会員が企画した松が岡・藤が谷地区の文人、文化人の住居跡等をたどった。途中、青木会員の好意で満開の桜をめりながら庭でお茶をご馳走になった。
- (2) 86号に寄稿された宮崎弥代さん所蔵の古地図が紹介された。
5. お話—伊藤会員による「航空写真から見た藤が谷の高瀬邸」について興味深いお話があった。

新入会員 原 雅子氏、吉武正子氏、矢田建爾氏、佐藤久美子氏紹介

運営委員会 4月29日(火) 12名出席

第17回総会・平成15年5月例会 5月13日(火) 10時～12時 23名出席

第17回総会 冒頭に新任の鵠沼市民センター長渡辺忠雄氏の挨拶があった。その後、別紙「第17回総会議案書」の審議を行い全会一致で承認された。

また、有田会長他、役員、運営委員も決定した。

5月例会

議題1. 鵠沼中学の総合学習について—6月10日(火)に鵠沼中学にて総合学習の一環として郷土の歴史を教えてもらいたいとのこと、渡部会員を担当者として具体的につめることとした。

2. 例会通知の配布ルートについて—新体制となり新しいルートを決めた。
3. お話—渡部会員より「鵠沼の風土と歴史」についてお話があった。

新入会員 高崎敏武氏、竹田裕記氏、渡部かほり氏紹介

運営委員会 5月27日(火) 12名出席

平成15年6月例会 6月10日(火) 10時～12時 27名出席

議題1. 会誌第87号について—渡部編集委員長より進行状況の説明あり。

2. ホームページ委員会について—杉本ホームページ委員長より現行のテス

ト版に変えて、正式版を松岡会員のコンピュータから公開する方向について報告された。

3. 「鶴沼の緑と文化財を守る会」アンケート結果報告会について—6月15日(日)公民館ホールで行われることの報告と、併せてアンケート集約に対する会員の協力に感謝の意が表された。(中島会員より)
4. 公民館の郷土資料室について—6月16日の検討委員会に会を代表して内藤会員、中島会員が出席する。
5. サークル交歓会について—6月18日有田会長が出席する。
6. 「鶴沼タイム」について—鶴沼中学校一年生の“総合的学習”の取り組み。学校側から協力要請があった。6月17日(火)渡部会員をリーダーに取り組む。
7. お話—内田会員より「鶴青会」についてお話があった。

運営委員会 6月24日(火) 13名出席

平成15年7月例会 7月8日(火) 10時~12時 26名出席

- 議題1.** サークル交歓会について—6月17日に出席した有田会長より報告。10月25日(土)~26日(日)の公民館祭りのスケジュール等について。
2. 鶴中の校外学習について—6月17日に行われ会員が多数協力して生徒はもちろん教職員からも感謝された。9月までには生徒が「まとめ」を行う予定。今後も同様な依頼がありうる(渡部会員より)。「今後共地域のために協力していこう」という意見が多数。
3. 郷土資料展示室について—内藤、中島両会員より報告。6月16日に行われた検討委員会のメンバー構成(19名)、分科会の活動状況、今後の日程などの説明。公民館長より公民館祭りに展示室を使ったイベントの企画について打診されている。

見学会—例会終了後、見学会「東屋の面影をたずねて」を実施。旧東屋の敷地内にあり昔日の面影を残している家屋3軒を見学する(江守邸、杉沢邸、深瀬邸)。この場を借りて気持ちよく見学を許していただいた方々に感謝いたします。

運営委員会 7月29日(火) 12名出席

平成15年8月例会 8月12日(火) 10時~12時 24名出席

- 議題1.** 郷土資料館について—内藤、中島両会員より説明。①検討委員会から運営委員会に移行するため規約作りなどの準備に入っている②8月7日に施設見学会を実施(座間、大和)③事務局より当会が要望していて準備・保管スペース確保のための“間仕切り”について、前向きな発言があった。

2. 公民館祭りについて—展示内容は鶴沼の今昔の写真を展示するものを中心に企画委員会で検討することとした。
3. その他—総務担当の中島副会長よりホームページにアクセスした人からの問い合わせがあり、中には“抜き刷り”を送って欲しいという人もいる。——ホームページのあり方も含めた問題なので運営委員会などで検討する。
4. お話—内藤会員より「本土初空襲の思い出」についてお話があった。

新入会員 高田清祐氏、竹内広弥氏紹介

運営委員会—8月29日(火) 13名出席

平成15年9月例会 9月9日(火) 10時～12時 24名出席

今回は会場を万福寺とし「緑陰講座」という形態を取った。(この場を借りて万福寺さんのご好意に感謝いたします)

議題1. 例会の「お知らせ」の形式について—今回初めて葉書形式をやめてA4版(帯封付き)を採用したが10月以降もこの形式を継続する。

2. 公民館祭りについて—①本日10時より展示打ち合わせがあり内藤会員が出席している。②写真展示については、福地さんの分については本日文書館より有田、内藤両会員が借り出す(アルバム28巻)。山上さんの分は渡部会員が長野の山上氏の自宅を訪問する。③打ち合わせから帰った内藤会員より追加報告→会場は郷土資料展示室、当会の「今昔写真展示」と「鶴沼の歴史」「公民館の歴史」の三つを並行的に展示する。展示期間は12月中旬まで。全体のコーディネータは内藤会員とする。
3. その他 ①近代文学館が来年4月に開催を予定している「芥川龍之介展」のため「鶴沼」の記事2点のコピーを希望している→出典を明らかにしてOK。また近代文学館より「井上 靖展」の案内と共に入場券の配布を受けた。
4. 「鶴沼」について—(渡部編集委員長より) ①87号は68ページで200部発行予定。②今後の予定→89号の特集「高瀬邸」、90号の特集「鶴沼と戦争」
5. お話—浅野会員より「万福寺の由来」についてお話があった。

《緑陰講座》「内藤千代子について」高野 修先生(学習院大学講師・遊行寺宝物館専門研究員・元藤沢文書館館長)

講座終了後、渡部会員の案内で万福寺境内の「藤沢宿大磯屋と飯盛女の墓」「内藤千代子墓」「森銃三夫妻の墓」「日本電子硝子公害闘争記念碑」、空乗寺「大橋重政墓」などを見学した。

編集後記

- * 鈴木三男吉大編集長が、「卒寿」を迎えられたのを機に引退を表明されました。なにしろ、氏は日本出版界を代表する人物の一人ですからその後任に誰がついても役不足になることは間違いありません。不肖渡部が後塵を拝する羽目になりました。どうか、前任者の手腕と比較することだけは、平にご容赦の程を。
- * 幸い、鈴木前編集長はお達者ですから、今後とも御指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。
- * さて、87号は田中隆尚・森 銑三という、実に格調高い鶴沼ゆかりの人物を冒頭に掲げました。この二人は当初全く別々にプランが出てきたのですが、意外にも関係が深いことが判明し、田中氏が森氏について書かれた文章を「再録」ということで間に置きました。
- * 続いて、江ノ電鶴沼駅を挟んで南と北にあった大豪邸を採りあげました。屋敷の豪壮さもさることながら、そこを舞台に繰り広げられた人々の交流がまた格調高いのです。鶴沼の奥深さが読みとれます。
- * 今号は片桐幸雄氏・石井 梢氏・新田貴代氏・菊本昭一氏と会員外の4氏の玉稿を頂戴しました。記して深く感謝申し上げます。
- * また、川戸マツさんのご案内で鶴沼を歩くことができたことも忘れがたい思い出となりました。
- * 次号は福永陽一郎の【下】を掲載すると共に、ゆかりの方のご寄稿も予定しています。さらに89号・90号の企画も話されています。

(渡部)

前号・前々号 正誤表

号	頁	行	誤		正
85	10	下から3	北に厚く南に厚い	→	北に厚く南に薄い
86	28	11	鶴沼海岸3-10-23	→	鶴沼海岸2-10-23
86	30	2	鶴沼海岸3-6	→	鶴沼海岸2-6
86	39	16	弟=欽一	→	弟=繁造の子=欽一

『鵠沼』 第87号

平成15年 9 月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001